公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第631集

五箇川入堤外遺跡
小合地西遺跡

国道354号板倉北川辺バイパス社会資本総合整備（広域・埼玉）（活力・重点）事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2017

群馬県館林土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

五箇川入堤外遺跡・小合地西遺跡
国道354号板倉北川辺バイパス社会資本総合整備（広域・埼玉）（活力・重点）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
二〇一七
群馬県館林土木事務所　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

五箇川入堤外遺跡
小合地西遺跡

国道354号板倉北川辺バイパス社会資本総合整備(広域・埼玉)(活力・重点)事業に伴う
埋　蔵　文　化　財　発　掘　調　査　報　告　書

2017

群馬県館林土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

五箇川入堤外遺跡・小合地西遺跡全景（東から）

五箇川入堤外遺跡は利根川の派川であった旧合の川の旧流路内に位置する。遺跡の西側には低地帯が広がり、かつては洪水常襲地帯であった。現在は、群馬県内有数の水田地帯である。小合地西遺跡はこの低地帯に所在する。

序

一般国道354号は、高崎市を起点とし、埼玉県加須市を経由して茨城県鉾田市に至る幹線道路です。このうちＪＲ高崎駅東口から館林市までの区間は東毛広域幹線道路として平成26年８月に全線開通し、群馬県内の東西交通の要として位置づけられています。そして、さらに埼玉県・茨城県への安全な物流を目的として北川辺バイパスの早期開通が望まれています。

五箇川入堤外遺跡・小合地西遺跡は群馬県邑楽郡板倉町に所在する中・近世の集落遺跡です。この地域は利根川、谷田川、旧合の川に囲まれた低地帯で、群馬の水郷地帯としても有名ですが、夏の増水期には、しばしば洪水氾濫に苦しめられてきました。しかし度重なる洪水に負けることなく、溝を掘りなおしたり畠の区画を復元したりしながら、現在まで農地として利用してきた先人たちの苦労が発掘調査により明らかになりました。周辺で発掘調査例が少ないこの地域の歴史を紐解くうえで、本報告書が貴重な資料となるものと確信しております。

最後になりましたが、群馬県館林土木事務所、群馬県教育委員会、板倉町教育委員会、ならびに地元関係者の皆様には、発掘調査から報告書作成にいたるまで、多大なご指導・ご協力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、これらの関係者の皆様に心より感謝申し上げるとともに、本書が歴史研究の資料として多くの皆様に活用されることを願いまして、序といたします。

平成29年11月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長　　中 野 三 智 男

例　　言

1　本書は、平成29年度国道354号板倉北川辺バイパス社会資本総合整備(広域・埼玉)(活力・重点)事業に伴い発掘調査された、五箇川入堤外遺跡・小合地西遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　所在地　五箇川入堤外遺跡　群馬県邑楽郡板倉町下五箇2011-2、2012-2、2013-3、2014-3、2015-3、2016-2
小合地西遺跡　群馬県邑楽郡板倉町下五箇329-4、330-3、331-4、332-4、333-3、334-4、335-5、335-7、336-3、337-4、338-3、342-4、342-5、343-2、343-4、344-2、344-4、345-2、346-3、346-4、607-3、607-4、608-2、608-5、608-6、609-2、609-3

3　事業主体　群馬県館林土木事務所

4　調査主体　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

5　発掘調査期間および体制は以下の通りである。
履行期間　平成28年12月１日～平成29年３月31日
調査期間　平成29年１月４日～平成29年３月31日
調査担当　松村和男(主任調査研究員・調査統括)　坂本和之(主任調査研究員)
遺跡掘削請負工事　スナガ環境測設株式会社
遺構地上測量　技研コンサル株式会社
空中写真撮影　技研コンサル株式会社

6　整理事業期間および体制は以下の通りである。
履行期間　平成29年８月１日～平成29年11月30日
整理期間　平成29年８月１日～平成29年９月30日
遺物実測・観察表・写真撮影　石製品：津島秀章(資料２課長(総括))　縄文土器：石坂　茂(専門調査役)
陶磁器：徳江秀夫(専門調査役)　大西雅弘(上席専門員・調査１課長)
金属製品：板垣泰之(専門員)
デジタル編集・本文執筆　齊田智彦(主任調査研究員・資料統括)

7　発掘調査諸資料および出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

8　発掘調査および整理事業・本報告書の作成には下記の機関よりご指導・ご教示を頂いた。
群馬県教育委員会文化財保護課、板倉町教育委員会

凡　　例

1　報告書に用いた座標・方位は、すべて国家座標第Ⅸ系(世界測地系)を使用した。北方位はすべて座標北で、真北方向角はX＝22,100、Y＝-16,400で東偏0°06′27″である。

2　遺構・遺物の縮尺は、原則として以下の通りとし、それぞれスケールを明示した。ただし遺構・遺物によっては異なる縮率を用いたものもある。

遺構　土坑1：60　溝1：80・1：100・1：160・1：200　同断面図1：40・1：80・1：100

畠1：80　道1：160　同断面図1：40

遺物　陶磁器1：3　石製品・金属製品1：2または1：1

遺物写真はおよそ1：2となるように撮影した。

3　遺構の主軸方向・走向を示すため、座標北を基準として東に傾いた場合はN－○°－E、西に傾いた場合はN－○°－Wというように表記した。遺構・遺物の計測値で、全体を計測できないものについては、現存の値を記載し(　)で表した。

4　遺物番号は出土遺構ごとの連番で、番号は本文・挿図・表・写真図版ともに一致する。

5　本書で使用したテフラの呼称は以下の通りである。

榛名二ツ岳伊香保テフラ　Hr-FP(6世紀中頃)

6　土層や土器の色調観察は、原則として農林水産省農林水産技術会議監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を使用した。

7　本書で使用した地図は以下の通りである。

国土地理院発行　20万分の1地勢図「宇都宮」平成10年発行

5万分の1地形図「古河」平成11年発行

2万5千分の1地形図「館林」平成14年発行、「古河」平成13年発行

第一軍管地方二万分一迅速測図「藤岡町」明治17年発行

目　次

口絵
序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
写真目次

第１章　調査の経過
　第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の方法 …… 2
　第３節　発掘調査の経過 …… 3
　第４節　整理作業の経過 …… 3
第２章　遺跡の立地と歴史的環境
　第１節　遺跡の地形と立地 …… 5
　第２節　周辺遺跡の分布 …… 6
第３章　五箇川入堤外遺跡の遺構と遺物
　第１節　概要 …… 8
　第２節　調査された遺構と遺物 …… 8
　（１）土坑 …… 8
　（２）溝 …… 8
　（３）畠 …… 9
　（４）遺構外出土遺物 …… 9
第４章　小合地西遺跡の遺構と遺物
　第１節　概要 …… 15
　第２節　調査された遺構と遺物 …… 15
　（１）土坑 …… 15
　（２）溝 …… 15
　（３）１号道 …… 17
　（４）遺構外出土遺物 …… 17
第５章　総括 …… 25

遺構一覧表
遺物観察表
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　五箇川入堤外遺跡・小合地西遺跡と群馬県の地勢 ・・・・・・・1
第２図　五箇川入堤外遺跡・小合地西遺跡の位置 ・・・・・・・・・・・・2
第３図　五箇川入堤外遺跡の調査区とグリッドの設定 ・・・・・・・・・3
第４図　小合地西遺跡の調査区とグリッドの設定 ・・・・・・・・・・・・4
第５図　五箇川入堤外遺跡・小合地西遺跡の基本土層 ・・・・・・・・・4
第６図　遺跡周辺の地形 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第７図　周辺の遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第８図　五箇川入堤外遺跡の遺構分布 ・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第９図　１～３号土坑と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第10図　４～13号土坑と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第11図　１・２号溝と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第12図　１号畠 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第13図　１号畠・トレンチ・遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・14
第14図　小合地西遺跡の遺構分布(１区) ・・・・・・・・・・・・・・・・15
第15図　小合地西遺跡の遺構分布(２区・３区)・・・・・・・・・・・・・16
第16図　１号土坑・１号溝と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第17図　１号溝出土遺物・２・３号溝 ・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第18図　３号溝(２面)・４号溝と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・20
第19図　２・３号溝・遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第20図　１号道 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
第21図　２面トレンチ設定図・断面① ・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第22図　２面トレンチ設定図・断面② ・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第23図　五箇川入堤外遺跡と現在の区画 ・・・・・・・・・・・・・・・・25
第24図　五箇川入堤外遺跡と明治５年の区画 ・・・・・・・・・・・・・・25
第25図　島悪途遺跡の区画と天明泥流下の畠の区画 ・・・・・・・・・・・25
第26図　上郷岡原遺跡の調査前の区画と天明泥流下の区画 ・・・・・・・25
第27図　小合地西遺跡の溝・道と手申地券字引絵図 ・・・・・・・・・・26
第28図　小合地西遺跡付近の迅速測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・26
第29図　昭和21年米軍撮影空中写真 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
第30図　昭和22年米軍撮影空中写真 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

表　目　次

第１表　周辺の遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第２表　五箇川入堤外遺跡遺構一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第３表　小合地西遺跡遺構一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第４表　五箇川入堤外遺跡遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第５表　小合地西遺跡遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29・30

写真目次

PL．1　１．五箇川入堤外遺跡調査前全景(西から)
　　２．１号土坑全景(北東から)
　　３．２号土坑全景(北東から)
PL．2　１．１号土坑土層断面(南西から)
　　２．２号土坑土層断面(南西から)
　　３．３号土坑土層断面(南西から)
　　４．４号土坑土層断面(南西から)
　　５．３号土坑全景(北東から)
　　６．４号土坑全景(南西から)
PL．3　１．５号土坑全景(南西から)
　　２．６号土坑全景(南西から)
　　３．５号土坑土層断面(南西から)
　　４．６号土坑土層断面(南西から)
　　５．７号土坑土層断面(南西から)
　　６．８号土坑土層断面(南西ら)
PL．4　１．７号土坑全景(南西から)
　　２．８号土坑全景(南西から)
　　３．９号土坑全景(北から)
　　４．10号土坑全景(北から)
　　５．左より11～13号土坑土層断面(南から)
　　６．11号土坑全景(北から)
PL．5　１．12号土坑全景(北から)
　　２．13号土坑全景(北から)
　　３．１号溝土層断面(西から)
　　４．２号溝土層断面(北から)
　　５．１号溝全景(東から)
　　６．２号溝全景(北から)
PL．6　１．１号畠全景(１)(北から)
　　２．１号畠全景(２)(北から)
PL．7　１．小合地西遺跡全景(南東から)
　　２．１区調査風景(南東から)
　　３．２区１面調査区全景(南東から)
　　４．１号土坑土層断面(南東から)
　　５．１号土坑全景(南東から)
PL．8　１．１号溝全景(西から)
　　２．１号溝土層断面(西から)
　　３．１号溝調査風景(東から)
　　４．２号溝全景(東から)
PL．9　１．２号溝土層断面(東から)
　　２．２・３号溝土層断面(西から)
　　３．３号溝土層断面(東から)
　　４．４号溝全景(南西から)
　　５．１号道土層断面(南から)
　　６．１号道全景(605-850・西から)
　　７．１号道全景(600-812・西から)
　　８．３区２面調査区全景(南東から)
PL．10　五箇川入堤外遺跡出土遺物
PL．11　小合地西遺跡出土遺物(１)
PL．12　小合地西遺跡出土遺物(２)

第１章　調査の経過

第１節　発掘調査に至る経緯

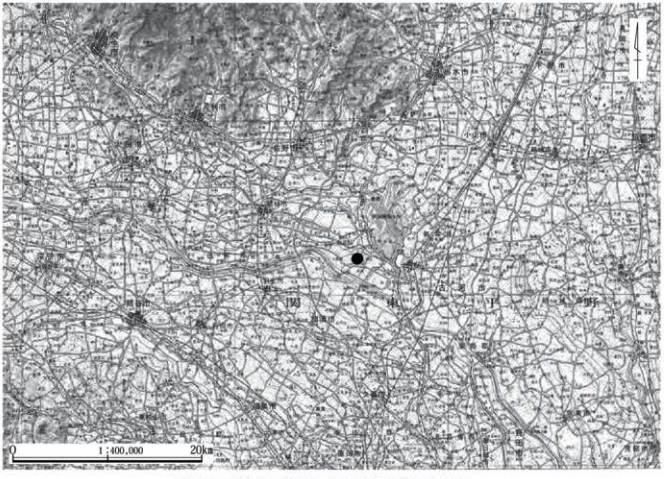
五箇川入堤外遺跡・小合地西遺跡は、邑楽郡板倉町の南東部、下五箇に所在する。遺跡の北約2.0㎞には東部日光線板倉東洋大学前駅、約2.5㎞東には渡良瀬遊水池がある。駅の西側には板倉ニュータウン産業用地が開発され、東洋大学をはじめ多くの企業が誘致されている。遺跡周辺は水田に囲まれ、標高は14～15mのところにあたる。

国道354号板倉北川辺バイパスは、板倉町大字海老瀬から埼玉県加須市柏戸に至り、全長は約4.6㎞である。このうち群馬県側の予定地は、海老瀬から下五箇までの2.6㎞である。群馬県と埼玉県・茨城県を結ぶこのバイパスは安全な緊急輸送道路・広域連携幹線道路整備を実現するため、早期開通が望まれている。

群馬県教育委員会文化財保護課は、群馬県館林土木事務所の照会を受け、用地買収が終了した区間について、平成27年10月と平成28年２月に重機を用いた試掘調査を実施した。その結果、小合地西地区と五箇川入堤外地区において遺構と遺物を確認したため、試掘対象地域の9,160㎡について埋蔵文化財発掘調査が必要と判断した。

平成28年12月１日、群馬県教育委員会文化財保護課の調整を受け、群馬県館林土木事務所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との間で発掘調査委託契約が締結され、平成29年１月より同年３月までの期間で発掘調査が実施されることとなった。

なお、遺跡名称については、周知の名称である「五箇川入堤外遺跡」「小合地西遺跡」とした。



第１図　五箇川入堤外遺跡・小合地西遺跡と群馬県の地勢

第２節　発掘調査の方法

１　調査区とグリッドの設定

調査区の名称は調査工程管理のために用いたが、遺構番号は遺跡ごとに通し番号とした。

平面図を記録する測量用のグリッドは、平面直角座標系(平成14年国土交通省告示第九号)Ⅸ系を使用し、座標値の下３桁で呼称した。例えば、Ｘ軸＝22,120とＹ軸＝-16,950の交点をそれぞれ120、-950と略し、この地点を南東隅とする５ｍ四方の範囲を120-950グリッドと呼んだ。

２　基本土層

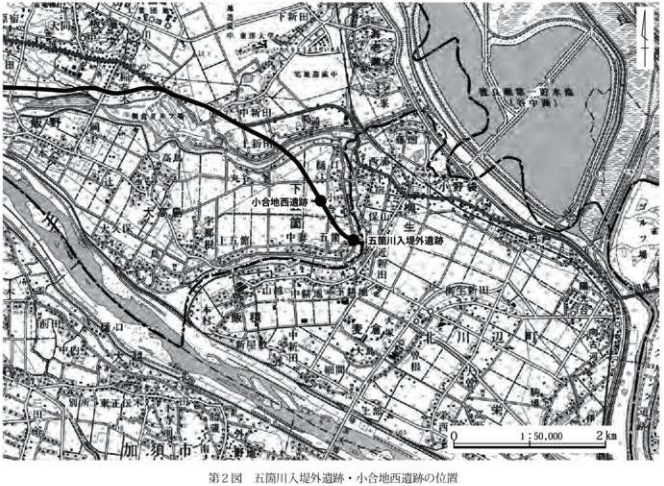
五箇川入堤外遺跡の基本土層は１区１号溝の土層断面と中央トレンチの土層を、小合地西遺跡の基本土層は２区東壁と中央トレンチの土層を、模式的に合成したものである。

五箇川入堤外遺跡

１層は現在の水田耕作土層、２層はその鋤床層である。３層はにぶい黄褐色の砂質土で灰黄褐色粘性土を含んでいる。４層はHr-FPの小円礫を含む灰黄褐色砂質土で、１号溝と１～10号土坑の埋没土である。５層はオリーブ灰色の粘性土でよくしまっている。６層はにぶい黄褐色砂質土で、下位ほど粘性が強い。

小合地西遺跡

１層は現在の水田耕作土層、２層はその鋤床層である。３層はにぶい黄橙土で夾雑物はほとんどない。４層は灰黄褐色土で、この上面を第１面として調査した。５層・６層・７層はにぶい黄褐色土で、それぞれ粘性がある。７層が特に強い。８層は褐灰色土で洪水による砂層であると考えられる。この層の下面を第２面としたが調査区の地点によって８層は認められない。９層はにぶい黄橙色土で、しまりが良く粘性が強い。10層はにぶい黄橙色土で粘性がある。11層は褐色土で炭化物・白色粒子を含み、１号溝付近では鉄分を多く含む。12層は明オリーブ灰色土でしまりが良い。11層がグライ化したもので１号溝付近の水が多いところで認められる。13層は黄褐色の砂質土で鉄分が多い。14層は灰黄褐色の砂層で粒子が細かく粘性がある。



第２図　五箇川入堤外遺跡・小合地西遺跡の位置

３　調査と記録の方法

調査は、大型重機を用いて表土掘削を行ったのち、ジョレンを用いて人力で遺構確認を行った。把握した遺構は、セクションベルトを設定し、色調・硬度・特徴的な夾雑物を記載した。各遺構の平面図および断面図はデジタル測量を委託し、必要に応じた縮尺で作成した。

遺構写真は、35㎜デジタルカメラと、ブローニーモノクロフィルムを使用した６×７判カメラを併用して撮影を行った。

第３節　発掘調査の経過

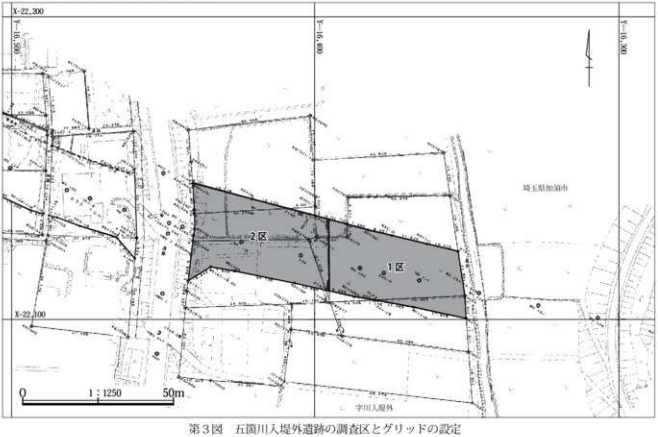
五箇川入堤外遺跡・小合地西遺跡の調査は平成29年１月４日から３月31日まで実施した。調査経過の概略は以下のとおりである。

１月４日　発掘調査開始。
　10日　１区表土掘削、遺構確認(五)。１区表土掘削開始(小)。
　11日　土坑調査開始(五)。
　12日　溝調査開始(五)。
　13日　１～８号土坑、１号溝写真撮影、測量(五)。
　16日　２区表土掘削開始(五)。
　18日　１区２面トレンチ調査(五)。
　20日　２区１号畠、２号溝調査(五)。
　　１・３区表土掘削、３区遺構確認(小)。
　23日　３区遺構確認(小)。
　25日　１号畠、２号溝写真撮影、測量(五)。
２月１日　１区１面全景写真撮影。
　２日　１区２面深堀トレンチ調査、３区埋め戻し終了(小)。
　６日　１区埋め戻し、２区表土掘削開始(小)。
　７日　２区遺構確認、１号溝掘削開始(小)。
　15日　２・３号溝掘削、１号溝写真撮影(小)。
　17日　遺構測量開始(小)。
　22日　２区１面全景写真、２・３号溝、１号道写真撮影(小)。
　　遺跡全景写真撮影(五)。
　23日　２区２面表土掘削、遺構確認作業開始(小)。
　28日　３・４号溝測量(小)。
３月１日　２区２面全景、３・４号溝写真撮影(小)。
　６日　２区埋め戻し開始(小)。
　７日　空中写真撮影(五・小)。
　22日　埋め戻し終了。
　31日　調査終了(小)。
※(五)五箇川入堤外遺跡、(小)は小合地西遺跡

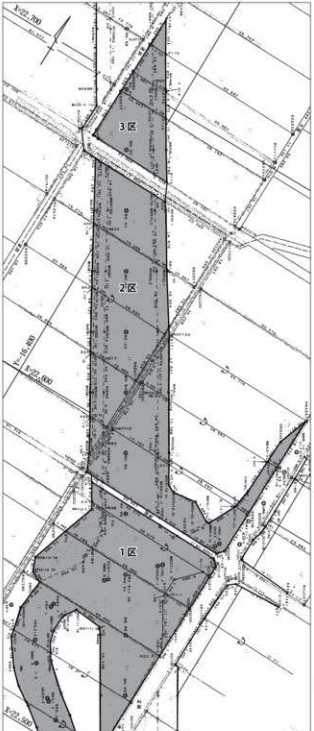
第４節　整理作業の経過

整理事業については、群馬県教育委員会文化財保護課の調整を受け、群馬県館林土木事務所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との間で、平成29年７月31日に、事業の委託契約が交わされた。同年８月１日より同事業団本部にて整理作業を開始した。

すでに洗浄・注記を済ませ、収納してあった遺物を遺構とその周辺遺構ごとに接合し、図化する個体を選定



第３図　五箇川入堤外遺跡の調査区とグリッドの設定



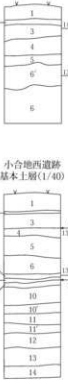
第４図　小合地西遺跡の調査区とグリッドの設定

後、復元・写真撮影、実測・採拓、観察作業を行った。実測は三次元計測器や長焦点の実測用写真を併用しながら行った。石器はロットリングによるトレース後、スキャニングによりデジタル化、土器はデジタルトレースを実施したものである。遺物写真は35㎜フルサイズのデジタルカメラにより撮影後、色調等を調整した。金属製品は、クリーニング、修復・保存処理後、写真撮影、実測、観察作業を行った。

遺構図は、調査段階でデジタルデータ化しており、これを編集して完成図面とした。また、遺構写真は、発掘調査で撮影したデジタル写真から掲載写真を選択し、色調等の調整後デジタル入稿用データを作成した。

これらの作業と並行して本文および観察表と原稿を執筆し、デジタルデータ化した遺構図・遺物図とあわせてアドビ社のインデザインによりデジタル入稿データを編集した。

９月30日に編集作業を完了し、出土遺物・図面・写真類の収納作業を終了した。そして11月に発掘調査報告書「五箇川入堤外遺跡・小合地西遺跡」を刊行した。



1　褐灰色土(10YR4/1)(水田耕作土)。
2　灰黄褐色土(10YR5/2)鉄分及びマンガンを含み、やや赤味を帯びる(水田床土)。
3　にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)灰黄褐色粘性土ブロックを10%程度含む。
4　灰黄褐色砂質土(10YR4/2)FPの小円礫(φ１～２㎝)を１%程度含む。
5　オリーブ灰色粘性土(5GY6/1)単一的。しまりは良い。
6′　にぶい黄橙色砂質土(10YR6/4)６とほぼ同じだが、６よりもやや砂質。
6　にぶい黄橙色砂質土(10YR6/4)粘性有り。下半部は上半部に比べ粘性が強い。

1　灰黄褐色土(10YR4/2)しまりは悪く、ボロボロする。(現水田耕作土)。
2　黒褐色土(10YR3/2)鉄分を多く、マンガン含む。(現水田床土)。
3　にぶい黄橙色土(10YR6/3)単一的。
4　灰黄褐色土(10YR5/2)やや粘性有り。
5　にぶい黄褐色土(10YR5/3)粘性有り。
6　にぶい黄褐色土(10YR5/4)粘性有り。５よりもやや黄色味が強い。
7　にぶい黄橙色粘性土(10YR6/3)。
8　褐灰色土(10YR5/1)褐灰色砂層(洪水砂層)。
9　にぶい黄橙色粘性土(10YR7/4)しまりは良く、粘性は強い。
10　にぶい黄橙色粘性土(10YR6/4)９よりやや暗い。
10′　にぶい黄橙色粘性土(10YR7/4)10よりもやや明るい。φ１㎜以下の白色粒子(軽石？)を含む。
11　褐色土(10YR5/2)炭化物粒を３%程度、φ１㎜以下の白色粒子(軽石？)を１%程度含む。１号溝付近では、鉄分を多く含み、赤味が強い。
11′　にぶい黄橙色土(10YR6/3)11よりもやや明るい。φ１㎜以下の白色粒子(軽石？)を１%未満含む。炭化物は含まない。
12　明オリーブ灰色土(5GY7/1)しまりは良い。11層のグライ化したもの。１号溝付近の水が多いところで認められる。
13　にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)鉄分を多く含み、赤味を帯びる。
14　灰黄褐色砂層(10YR6/2)粒子は細かく、若干粘性有り。

第５図　五箇川入堤外遺跡・小合地西遺跡の基本土層

第２章　遺跡の立地と歴史的環境

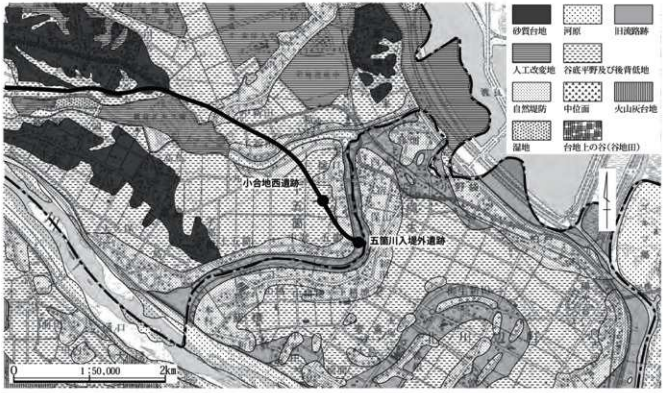
第１節　遺跡の地形と立地

遺跡は群馬県の最東端、群馬県邑楽郡板倉町大字下五箇にある。北部と東部を栃木県、南部を埼玉県と接し、茨城県とも約1.5㎞の距離である。板倉町の北側には渡良瀬川、南側には日本最大の流域面積を誇る利根川が流れている。夏の増水期には、しばしば洪水災害に見舞われたことから「水場」と呼ばれ、かつては県内唯一の水郷景観を呈していた。板倉町史によると、館林市から板倉町に至る渡良瀬川右岸の破堤は、宝永元(1704)年から明治43(1910)年までの間に40回、邑楽郡下の利根川左岸では、寛文11(1671)年から明治43年までの間に23回である。明治以降は土地改良事業が実施され、用排水路・排水機場が整備された。また、利根川と渡良瀬川の堤防の築堤により、昭和22(1947)年のカスリーン台風以降は大きな水害には見舞われていない。

板倉町は洪積台地と沖積低地で構成され、起伏に乏しい平坦地である。台地は邑楽台地・藤岡台地・西岡台地に分かれ西から東、北から南へ緩やかに傾斜している。遺跡にも近い邑楽台地は、太田市から館林市を経て板倉町まで東西にのびる台地で、西から東へ傾斜する。館林との境界付近では19～18m、板倉東部では16.6mほどの標高である。

旧合の川と呼ばれていた旧河道の両岸には自然堤防が形成されている。総延長は約４㎞で、幅150m前後、比高は１m程度である。利根川と旧合の川の関連については、島悪途遺跡(群埋文第376集)に詳細に述べられているのでここでは割愛するが、旧合の川は天保九(1838)年に締め切られて廃川になった。この川は、利根川の本流または支流と考えられ、上野国と武蔵国の国境とされていた。五箇川入堤外遺跡はこの自然堤防に囲まれた旧流路に位置する。

下五箇地区は、谷田川、旧合の川、利根川の自然堤防と邑楽台地に囲まれた後背湿地で、東西約２㎞、南北約１㎞である。この地域は水害の常襲地として知られ、排水が大変悪く、低湿な環境であった。小合地西遺跡はこの後背湿地の東部に位置する。



第６図　遺跡周辺の地形(土地分類基本調査「古河」をトレース、加筆)

第２節　周辺遺跡の分布

板倉町には、群馬県内の他の地域では見ることができない貝塚をはじめ、数多くの遺跡の調査が行われている。しかし、本遺跡周辺はほとんど発掘調査の例がなく、旧河川の自然堤防上や台地上に土器の散布が見られるのみである。周辺の主な遺跡は次の通りである。

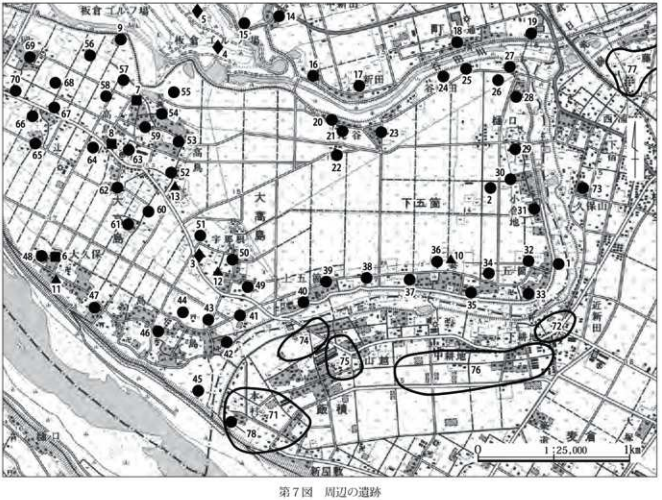
宇那根貝塚（３）では、遺構はすでに削平されていたが、ヤマトシジミ・ハイガイ・タニシなどの散布が認められた。小保呂第一貝塚（４）、小保呂第二貝塚（５）は谷田川沿いの自然堤防上に位置する縄文時代早期の貝塚で、カイのほかに茅山式土器が出土している。邑楽台地上の岡村遺跡(69)からは前期の黒浜式、後期初頭の竪穴住居４軒と称名寺式、堀之内Ⅰ・Ⅱ式土器が出土している。本遺跡(70)は後期・晩期の遺跡、関東地方では出土例の少ない土製仮面（土面）の出土が特筆される。遺構は住居が５軒と土坑墓が５基確認されている。辻遺跡(66)では縄文中期～後期の土器のほか縄文晩期と弥生時代中期の土器が出土した。

大塚山古墳（８）は径７ｍの円墳で、古墳の北西約25ｍの地点で中世の土坑墓６基が調査された。宇奈根西遺跡(51)では、この地域で初めて平安時代の住居１軒が調査された。

中世の板碑は自然堤防上や台地上に点在している。中妻中世墓(10)、大久保中世墓(11)、宇奈根中世墓(12)、高島中世墓(13)などがあげられる。

島悪途遺跡(45)は洪水層に埋もれた複数面の畠が確認されている。遺跡は天保九年の旧合の川の締め切り以降は、堤防の外側に位置する。五箇川入堤外遺跡は旧合の川の流路内にあることから、土地利用と洪水との関連を考えるうえで重要である。

このほか旧合の川の右岸に位置する埼玉県加須市の飯積遺跡(71)では古墳時代から奈良・平安時代にかけての住居が約200軒調査された。



第７図　周辺の遺跡

第１表　周辺の遺跡

No.	遺跡名	所在地		種別	概要	文献
		大字	小字			
1	五筒川入堀外遺跡（ごつつがわいりほりそといせき）	下五筒	川入堀外	集落跡	古墳・奈良・平安土師器	本報告
2	小合地西遺跡	下五筒	小合地・川入	集落跡		本報告
3	宇都根貝塚	大高島	宇都根	貝塚	縄文	板倉町の遺跡　1992板倉町教委
4	小保呂第一貝塚	板倉	小保呂	貝塚	縄文	伊勢ノ木・小保呂遺跡　1985板倉町教委
5	小保呂第二貝塚	板倉	小保呂	貝塚	縄文	同上
6	大久保古墳	大高島	本郷	古墳		群馬県古墳総覧　2017群馬県教委
7	稲荷神社古墳	大高島	高島	古墳	径約30mの円墳、直刀・須恵器	同上
8	大塚山古墳	大高島	高島	古墳	円墳　中世土師器据り鉢	町内遺跡Ⅴ　2000板倉教委
9	伊勢ノ木遺跡	飯野	合ノ谷	集落跡	縄文(後期)、古墳・奈良・平安土師器　須恵器	伊勢ノ木・小保呂遺跡　1985板倉町教委
10	中畑中世墓	下五筒	中畑	中世墓	中世(板碑)	板倉町の遺跡　1992板倉町教委
11	大久保中世墓	大高島	本郷	中世墓	中世(板碑)	同上
12	宇奈根中世墓	下五筒	宇奈根	中世墓	中世(板碑)	同上
13	高島中世墓	大高島	高島	中世墓	中世(板碑)	同上
14	中新田西上遺跡	海老瀬	中新田	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
15	西沓遺跡	海老瀬	東谷	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
16	上新田西遺跡	海老瀬	上新田	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
17	上新田東遺跡	海老瀬	上新田	散布地	縄文、古墳・奈良・平安土師器	町内遺跡Ⅷ　2008板倉町教委
18	通ノ上遺跡（とおりのかみ）	海老瀬	通	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
19	通ノ下遺跡（とおりのしも）	海老瀬	通	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
20	丸谷新田西遺跡	下五筒	丸谷新田	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
21	丸谷新田遺跡	下五筒	丸谷新田	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
22	丸谷遺跡	下五筒	丸谷新田	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
23	谷新田遺跡	下五筒	丸谷新田・谷新田	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
24	北田遺跡	下五筒	谷新田	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
25	北田東遺跡	下五筒	北坪	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
26	北坪西遺跡	下五筒	北坪	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
27	北坪北遺跡	下五筒	北坪	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
28	北坪遺跡	下五筒	北坪	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
29	樋ノ口遺跡	下五筒	樋ノ口・樋ノ口前	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
30	樋ノ口前遺跡	下五筒	樋ノ口前・小合地	散布地	古墳・奈良・平安土師器　須恵器	同上
31	小合地遺跡	下五筒	小合地・川入	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
32	五筒川入北遺跡	下五筒	川入・五筒	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
33	五筒川入遺跡	下五筒	五筒	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
34	五筒遺跡	下五筒	五筒	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
35	中畑東遺跡	下五筒	五筒・中畑	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
36	中畑北遺跡	下五筒	中畑	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
37	中畑遺跡	下五筒	中畑	散布地	古墳・奈良・平安土師器　須恵器	同上
38	上五筒東遺跡	下五筒	上五筒	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
39	上五筒北遺跡	下五筒	上五筒	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
40	上五筒南遺跡	下五筒	上五筒	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
41	島八反東遺跡	大高島	八反・本島	散布地	縄文、古墳・奈良・平安土師器	同上
42	島八反南遺跡	大高島	八反	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
43	島八反遺跡	大高島	八反	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
44	島八反西遺跡	大高島	八反	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
45	島墨遺跡	大高島	島墨迫	散布地	古墳・奈良・平安土師器	島墨遺跡群　2006群埋文
46	本島遺跡	大高島	本島・本郷	散布地	縄文、古墳・奈良・平安土師器　中世	同上
47	大久保下遺跡	大高島	本郷	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
48	大久保上遺跡	大高島	本郷	散布地	縄文、古墳・奈良・平安土師器	同上
49	下五筒遺跡	下五筒	宇奈根	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
50	宇都根東遺跡	大高島	宇都根・宇奈根	散布地	縄文、古墳・奈良・平安土師器　須恵器	同上
51	宇都根西遺跡	大高島	宇都根・高島	集落址	平安住居・土師器坏・須恵器坏	町内遺跡Ⅲ　1998板倉町教委
52	高島南遺跡	大高島	高島	散布地	縄文、古墳・奈良・平安土師器	同上
53	高島北遺跡	大高島	高島	散布地	縄文、古墳・奈良・平安土師器　須恵器	同上
54	高島天神遺跡	大高島	高島	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
55	中島遺跡	大高島	北根	散布地	縄文、古墳・奈良・平安土師器　須恵器	同上
56	岡遺跡	飯野	北越光	散布地	縄文、古墳・奈良・平安土師器　須恵器	同上
57	北越光遺跡	飯野	北越光・合ノ谷	散布地	縄文、古墳・奈良・平安土師器	同上
58	南越光遺跡	飯野	南越光	散布地	縄文、古墳・奈良・平安土師器	同上
59	高島原遺跡	大高島	高島	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
60	梁田北遺跡	大高島	梁田	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
61	梁田遺跡	大高島	梁田	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
62	大新遺跡	大高島	坪ノ内	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
63	大塚遺跡	大高島	高島	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
64	坪ノ内遺跡	大高島	坪ノ内・大道	散布地	縄文、古墳・奈良・平安土師器	同上
65	豊戸遺跡	飯野	辻	散布地	縄文(後期)、古墳・奈良・平安土師器	同上
66	辻(宗祇)遺跡	飯野	辻	集落址	縄文住居・土坑・縄文土器	町内遺跡Ⅱ　1997板倉町教委
67	大道遺跡	飯野	辻・大道・南越光	散布地	縄文、古墳・奈良・平安土師器	町内遺跡Ⅷ・Ⅸ　2003・2004板倉町教委
68	大道北遺跡	飯野	南越光	散布地	古墳・奈良・平安土師器	同上
69	岡村遺跡	飯野	岡	集落址	縄文住居・縄文土器	町内遺跡Ⅸ　2004板倉教委
70	本遺跡	飯野	本	散布地	縄文、古墳・奈良・平安土師器	本遺跡　1995板倉町教委
71	板植遺跡	飯植	本村	集落址	古墳住居192軒、奈良・平安住居53軒ほか	板植遺跡Ⅱ　2007（財）埼玉埋文
72	益井の神尻	麦倉	下耕地	中世	神尻碑	埼玉県遺跡地名表　1979埼玉県教委
73	久保山遺跡	久保山	—	中世	板碑	板植遺跡Ⅱ　2007（財）埼玉埋文
74	須賀遺跡	飯植	須賀	散布地	古墳、奈良・平安、中世　土師器片	埼玉県遺跡地名表　1979埼玉県教委
75	山越遺跡	飯植	山越	散布地	古墳、奈良、土師器片、カマド石、骨片、骨壺	同上
76	麦倉遺跡	麦倉	本村上、本村	散布地	土器片、板碑	同上
77	藤堀遺跡	小野袋	麦畑	散布地	古墳、奈良・平安、土師器	同上
78	鶴島遺跡	飯植	—	散布地	土師器、須恵器坏不明、墨書	板植遺跡Ⅱ　2007（財）埼玉埋文

第３章　五箇川入堤外遺跡の遺構と遺物

第１節　概要

五箇川入堤外遺跡では、土坑13基、溝２条、畠２面を調査した。１区の西側から検出された土坑群は、長さ５～15m、幅約１ｍで、深さ30～40cmで等間隔に並んでいる。

溝２条は、ほぼ直線的に掘削されている。１号溝を西に、２号溝を南東に延長すると調査区外で交わり区画溝の可能性が考えられる。

２区で検出された畠はサク状痕が確認できる面と１段高い面の２面が確認できた。畠のサク状痕よりも新しい、工具による耕作の痕跡も検出された。

第１面調査終了後、下面を想定して１区では北・中央・南トレンチの３カ所、２区では南側にトレンチ１カ所と北側を平面的に重機で掘り下げながら遺構確認を行った。しかし、洪水による砂層や部分的な落ち込み、遺物は認められたものの、遺構を確認することはできなかった(第８・14図)。

第２節　調査された遺構と遺物

（１）土坑(第９・10図　第２表　PL.１～５・10)

土坑は合計13基調査した。検出した地点から①１号溝北土坑群(１～８号土坑)、②１号溝南土坑群(９・10号土坑)、③２区土坑群(11～13号土坑)の３群に分類して報告する。

①１号溝北土坑群　１～８号土坑はいずれも細長く、断面形長方形で埋没土はFPの小円礫を含む灰黄褐色砂質土である。長さにばらつきはあるものの、長軸方位はN－47°～55°ではぼ一定の方向に掘削されていた。それぞれの土坑は0.22～0.26mでほぼ等間隔に掘削されているため、畠の耕作の痕跡の可能性も考えられる。１～３号土坑の底面には、工具による掘削の痕跡が認められた。図示した遺物は２号土坑から出土した産地不明の磁器(９図２土１)・在地系土器の内耳焙烙(同２土２)、３号土坑から出土した産地不明磁器(９図３土１)、４号土坑から出土した在地系内耳焙烙(10図１)である。出土遺物や埋没土の状況から、遺構の時期は中・近世と考えられる。

②２号溝南土坑群　９・10号土坑は調査区の南壁付近で検出された。そのため全容を明らかにできなかった。埋没土はFPの小円礫を含む灰黄褐色砂質土である。遺物は出土していないが埋没土の状況から、①の土坑群と同時期の遺構であると考えられる。

③２区土坑群　11～13号土坑は、２区のほぼ中央で検出された。12号と13号土坑は重複し、12号土坑の方が新しい。埋没土は11号と12号土坑はにぶい黄橙色の粘性のあるシルト質土で13号はにぶい黄褐色土である。図示はできなかったが、13号土坑からは中・近世の陶磁器片が少量出土している。

（２）溝

１号溝(第11図　第２表　PL.５)

位置：X＝22,106～107、Y＝-16,351～376　**重複遺構：**なし。　**形状：**ほぼ直線、断面形は逆三角形。　**走向：**N－89°－W　**規模：**調査長　25.72m　最大幅　1.43m　残存深　0.61m　底面比高　西端が0.38m高い。　**埋没土：**Hr-FPの小円礫を含む灰黄褐色砂質土。　**遺物：**なし。　**所見：**２号溝と調査区外でほぼ直交する区画溝であると考えられる。遺物は出土していないが、埋没土は１～11号土坑と同様であることから、中・近世の溝であると考える。

２号溝(第11図　第２表　PL.５・10)

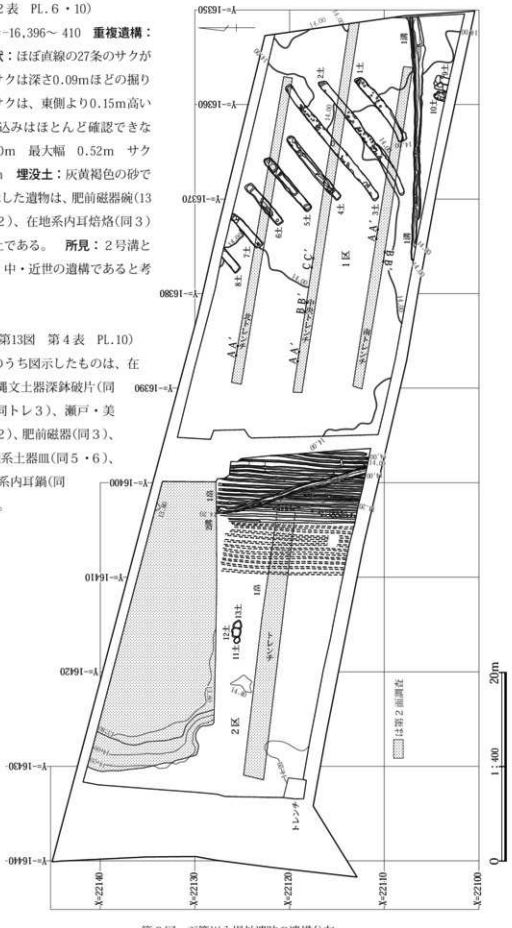
位置：X＝22,112～127、Y＝-16,399～403　**重複遺構：**１号畠。　**形状：**ほぼ直線、断面形は台形。　**走向：**N－15°－W　**規模：**調査長　16.44m　最大幅　0.68m　残存深　0.49m　底面比高　北端が0.12m高い。　**埋没土：**にぶい黄褐色砂質土。　**遺物：**産地不明の陶器片口(11図１)が出土している。　**所見：**１号溝と直交する区画溝であると考えれば中・近世の遺構であるが、地引絵図や米軍撮影空中写真から近代の溝である可能性が高い。

（３）畠（第12・13図　第２表　PL.６・10）

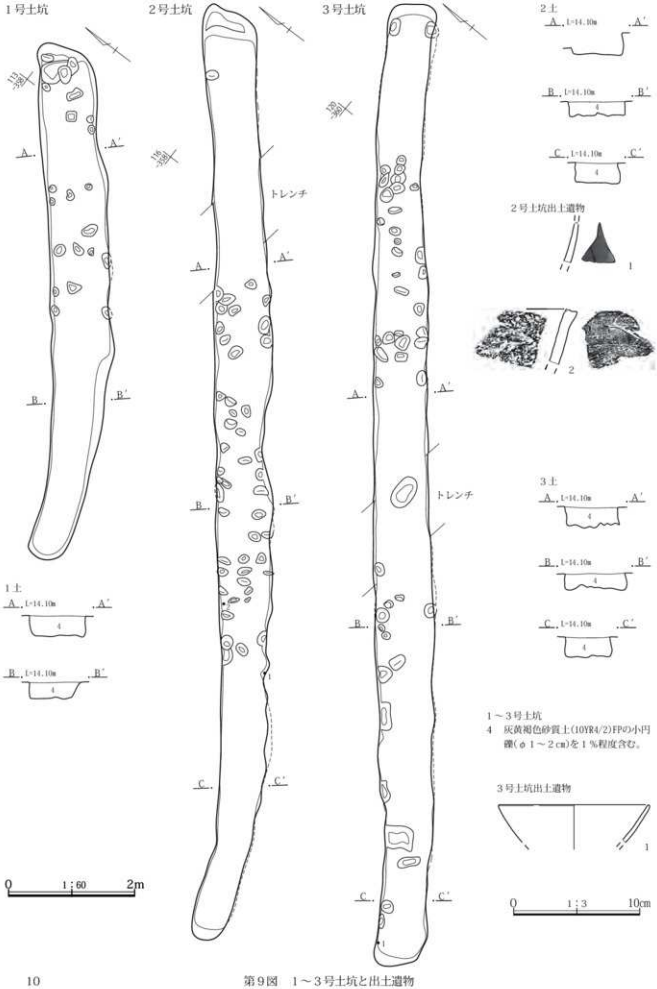
位置：X=22,111～ 129、Y=-16,396～ 410　**重複遺構：**２号溝の方が新しい。　**形状：**ほぼ直線の27条のサクが確認できた。東側の13条のサクは深さ0.09mほどの掘り込みを有する。西側14条のサクは、東側より0.15m高い場所に位置するため、掘り込みはほとんど確認できない。　**規模：**調査長　15.30m　最大幅　0.52m　サク間　0.50m　残存深　0.49m　**埋没土：**灰黄褐色の砂でしまりは悪い。　**遺物：**図示した遺物は、肥前磁器碗(13図１)、陶器鉢または皿(同２)、在地系内耳焙烙(同３)の３点で、埋没土からの出土である。　**所見：**２号溝との重複関係と出土遺物から、中・近世の遺構であると考えられる。

（４）遺構外出土遺物（第13図　第４表　PL.10）

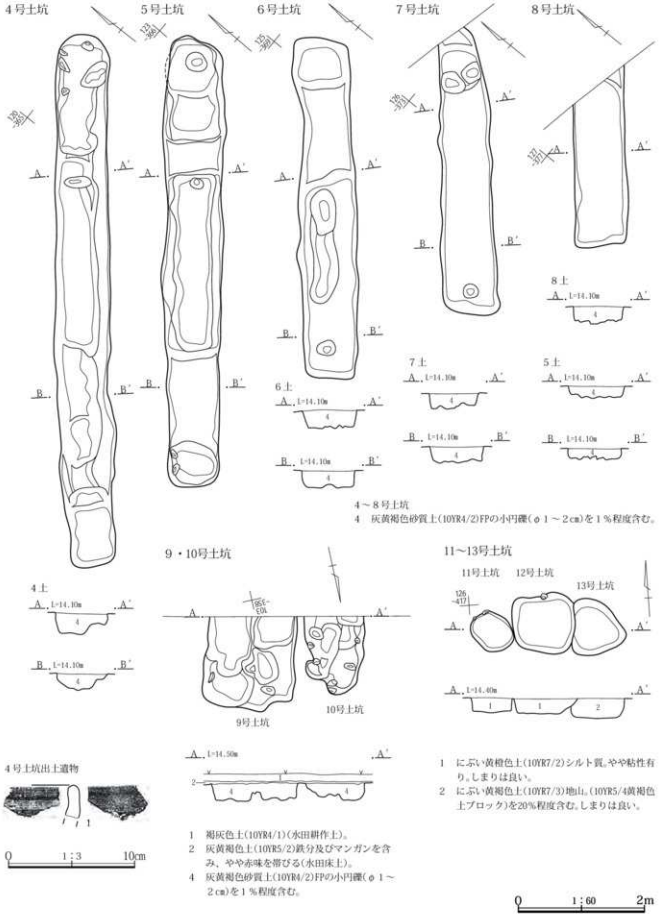
遺構外から出土した遺物のうち図示したものは、在地系土器皿(13図トレ１)、縄文土器深鉢破片(同トレ２)、在地系内耳焙烙(同トレ３)、瀬戸・美濃陶器小碗(13図遺構外１・２)、肥前磁器(同３)、龍泉系青磁小片(同４)、在地系土器皿(同５・６)、瀬戸・美濃擂鉢(同７)、在地系内耳鍋(同８)、釘(同９)の12点である。



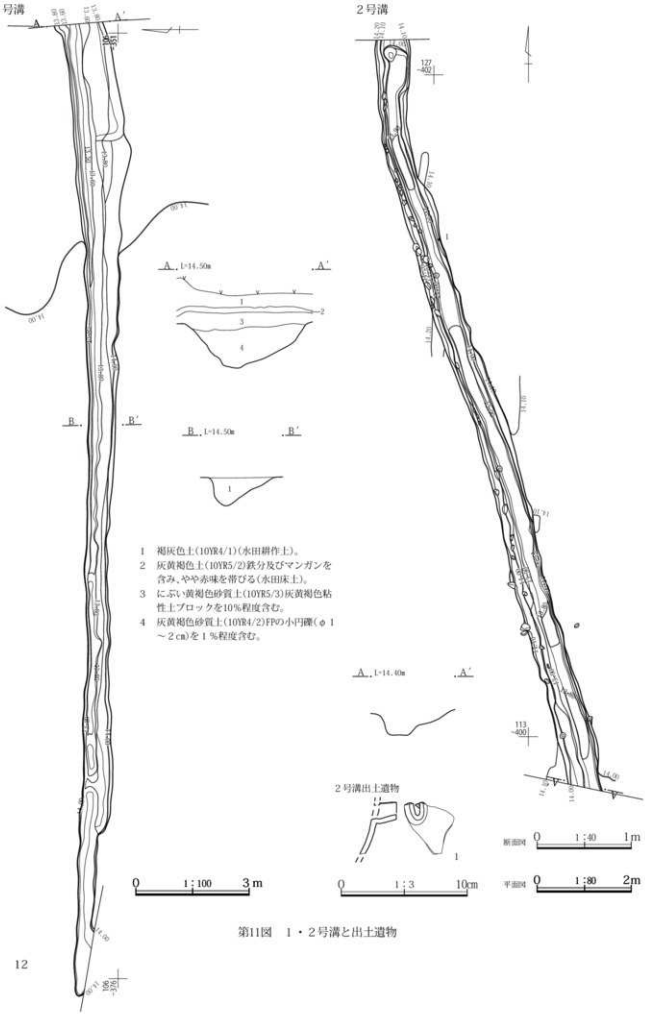
第８図　五箇川入堤外遺跡の遺構分布



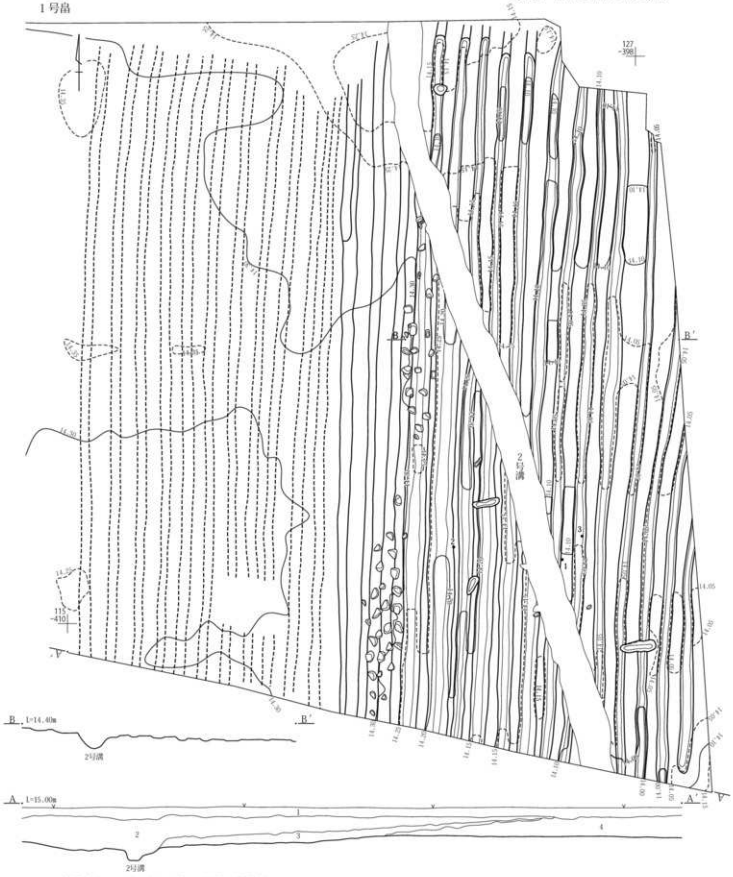
第９図　１～３号土坑と出土遺物



第10図　４～13号土坑と出土遺物



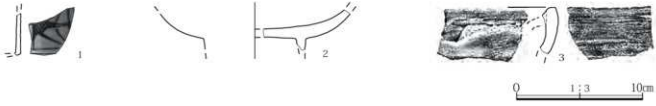
第11図　１・２号溝と出土遺物



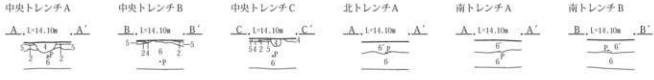
1　暗褐色土(10YR3/3)しまりは良い。(現畑の耕作土)。
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)かなり砂質。しまりは弱い。(２号溝の埋没土。圃場整備により動いていない土)。
3　灰黄褐色砂(10YR5/2)しまりは悪い。(１号畠埋没砂)。
4　にぶい黄褐色土(10YR5/3)かなり砂質。２よりもやや明るい。しまりは弱い。

第12図　１号畠

１号畠出土遺物

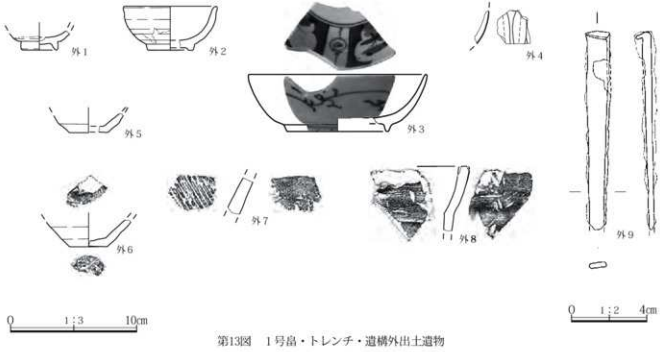


トレンチ



2　灰黄褐色土(10YR5/2)鉄分及びマンガンを含み、やや赤味を帯びる(水田床土)。
4　灰黄褐色砂質土(10YR4/2)FPの小円礫(φ１～２cm)を１％程度含む。
5　オリーブ灰色粘性土(5GY6/1)単一的、しまりは良い。
6'　にぶい黄橙色砂質土(10YR6/4)６とほぼ同じだが、６よりもやや砂質。
6　にぶい黄橙色砂質土(10YR6/4)粘性有り。下半部は上半部に比べ粘性が強い。

遺構外出土遺物



第13図　１号畠・トレンチ・遺構外出土遺物

第４章　小合地西遺跡の遺構と遺物

第１節　概要

小合地西遺跡で調査された遺構は、土坑１基、溝４条、道１条である。

１区は、基本土層３層の下面まで重機で掘り下げて遺構調査を行ったが、遺構は確認できなかった。第２面は１～３号トレンチを設定して遺構確認を行ったところ、１号トレンチ北側で１号土坑を検出した。なお、１～３号試掘トレンチは、文化財保護課による試掘の時によるものである。

２区の調査では、第１面で１～３号溝と１号溝を、第２面で４号溝を検出した。第１面の溝と道は、壬申地券地引絵図や米軍撮影の航空写真から戦後の圃場整備前まで使用されていたと考えられる。

３区では、１区同様に調査を行ったが、遺存状況の悪い畠の耕作痕が確認できたものの、顕著な遺構は認められなかった。第２面では１号トレンチを設定して調査したが遺構は確認できなかった。

第２節　調査された遺構と遺物

（１）土坑

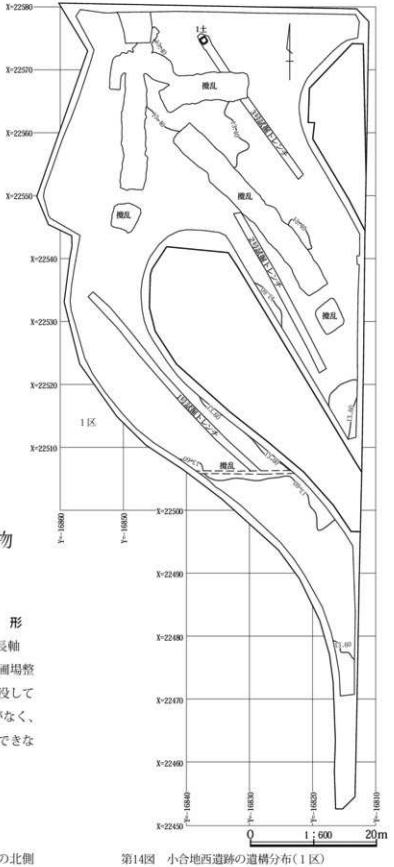
１号土坑（第16図　第３表 PL.７）

位置：X＝22,574、Y＝-16,837　**重複遺構**：なし。　**形状**：隅丸方形。　**長軸方位**：N－33°－W　**規模**：長軸1.06m、短軸0.94m、深さ　0.27m。　**埋没土**：圃場整備前の畑の耕作土で覆われ、にぶい黄褐色土で埋没していた。　**遺物**：なし。　**所見**：周辺に他の遺構がなく、遺物も出土していないため時期を特定することはできない。

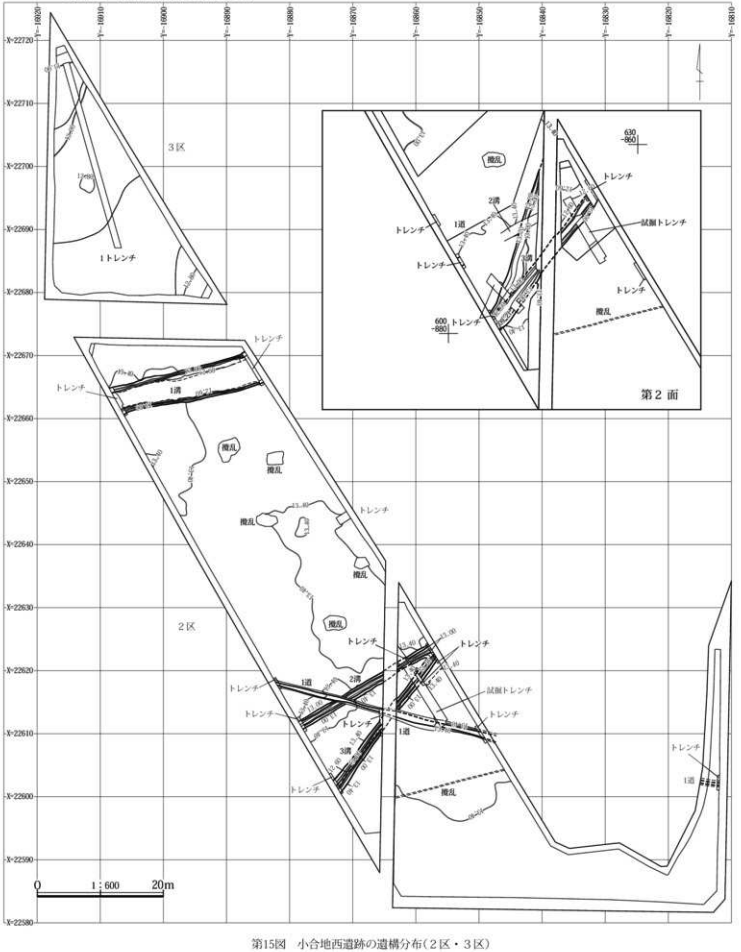
（２）溝

１号溝（第16図　第３表　PL.８・11）

位置：X＝22,660～670、Y＝-16,885～905　２区の北側



第14図　小合地西遺跡の遺構分布（１区）



第15図　小合地西遺跡の遺構分布（２区・３区）

に位置する。　**重複遺構**：なし。　**形状**：ほぼ直線、断面形は逆台形。　**走向**：Ｎ－75°－Ｅ　**規模**：調査長22.60m　最大幅　5.19m　残存深　0.95m　底面比高　東端が0.11m高い。　**埋没土**：下層は褐灰色粘性土でグライ化している。上層はにぶい黄橙色土主体で、しまりはあまり良くない。　**遺物**：磁器小杯(16図１)、瀬戸・美濃陶磁器(同２・４・８・12)や肥前磁器(同３・５～７)のほか、龍泉窯系青磁小片(同９)、陶器香炉(同10)、磁器香炉(同11)、常滑陶器(同13)、丹波陶器(同14)、在地系焙烙(同15～17)、鉄製釘(同18～20)、砥沢石製砥石(同21・22)などが出土している。出土遺物のうち、新しいものは近現代、最も古いものは13世紀までさかのぼることができる。　**所見**：壬申地券字引絵図や米軍撮影の航空写真から、昭和22年頃には使用されなくなったと考えられる。また出土遺物等から中・近世以降の溝であると推定される。

２号溝(第17・19図　第３表　PL.８・９・11)

位置：X=22,610～624、Y=-16,857～878　**重複遺構**：３号・４号溝と重複する。３号溝３期より古く、４号溝より新しい。**形状**：ほぼ直線で、断面形は逆三角形。**走向**：Ｎ－58°－Ｅ　**規模**：調査長　23.91m　幅　1.50m　残存深　0.81m　底面比高　東端と西端とではほとんど差がない。中央付近が最も深く両端との差は0.06mである。　**埋没土**：灰黄褐色土主体で、炭化物を少量含んでいる。　**遺物**：磁器小碗(19図１)、肥前磁器碗(同２)、瀬戸・美濃陶器碗(同３)、肥前磁器皿(同４)、金属製留め金(同５)、陶器摺鉢(同６)が出土している。**所見**：出土遺物や埋没土の状況から、近代の溝であると推定される。

３号溝(第17～19図　第３表　PL.９・11)

３号溝は少なくとも２回掘り直しが行われている。古い方から順に１期、２期、３期として報告する。

位置：X=22,600～623、Y=-16,856～873　**重複遺構**：２・４号溝。３期は２・４号溝よりも新しい。１・２期と４号溝の新旧関係は不明である。　**形状**：ほぼ直線、断面形は薬研状に近い。　**走向**：Ｎ－36°－Ｅ　**規模**：調査長　25.92m　幅　1.48m　残存深　３期0.96m、２期1.289m、１期1.23m。　底面比高　３期は東端が0.19m高く、１期は西端が0.11m高い。　**埋没土**：３期はにぶい黄橙色土主体、２期はにぶい黄褐色粘性土主体で下層はグライ化している。１期は黄褐色土主体で、下層は粘性がある。　**遺物**：磁器染付碗(19図１・２)、肥前磁器皿(同３)、在地系火鉢(同４・５)、瀬戸・美濃陶器碗(同６)、在地系内耳焙烙(同７)、鉄製品釘(同８・９)。　**所見**：溝は戦後の圃場整備前まで使用されたと考えられる。埋没土の状況や出土遺物から掘削された時期は中・近世であると推定される。

４号溝(第18図　第３表　PL.９)

位置：X=22,600～624、Y=-16,855～875　**重複遺構**：２・３号溝と重複する。２号溝、３号溝３期より古い。３号溝第１期・２期との重複関係は不明である。　**形状**：ほぼ直線、断面形は不明。　**走向**：Ｎ－31°－Ｅ　**規模**：調査長　23.90m　幅不明　残存深　0.47m　底面比高　南端が0.21m高い。　**埋没土**：にぶい黄褐色土で埋没する。　**遺物**：小片のため、図示することはできなかった。　**所見**：２・３号溝との重複関係から、中・近世の遺構であると推定される。

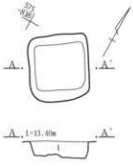
（３）１号道(第20図　第３表　PL.９)

位置：X=22,600～619、Y=-16,812～882　**重複遺構**：２～４号溝と重複し、１号道が最も新しい。　**形状**：ほぼ直線で、断面形は蒲鉾状である。　**規模**：調査長71.6m　幅　0.98m　**遺物**：なし。　**所見**：明治時代前半は、道として機能していることが確認できた。近世以前の遺構であると推定されるが、詳細な時期は不明である。

（４）遺構外出土遺物(第19図　第５表　PL.12)

遺構外から出土した遺物のうち図示したものは、備前磁器染付碗(19図１)、在地系内耳焙烙(同２)、在地系皿(同３)、常滑陶器甕(同４)、鉄製釘(同５)、砥石(同６・７)、火打石(同８)、寛永通寶(同９)の９点である。

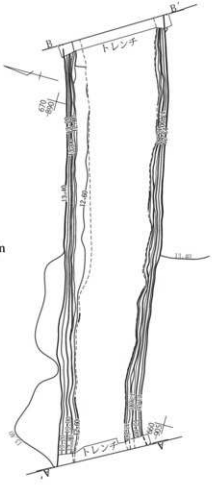
１号土坑



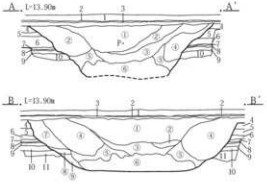
1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)
にぶい黄褐色ブロックを
50％程度含む。しまりは悪
く、ボソボソしている。

0　1:60　2m

１号溝

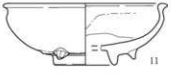


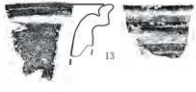
0　1:200　10m

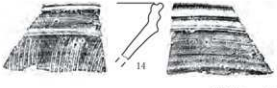


①　にぶい黄橙色土(10YR6/3)粘性有り、しまりは悪い。φ５～10cm程度の褐灰色粘性土ブロックを20％程度含む。
②　灰黄褐色土(10YR5/2)灰黄褐色土ブロックを含まず、やや粘性も弱い。しまりは弱い。
③　にぶい黄橙色土(10YR7/3)粘性有り、しまりは弱い。φ５～20cm程度の褐灰色粘性土ブロックを10％程度含む。
④　にぶい黄橙色土(10YR6/4)①よりもやや赤味を帯びる。ブロックを含まない。①よりもしまりは良い。
⑤　褐灰色粘性土(10YR5/1)鉄分を含み、赤味を帯びる。
⑥　褐灰色粘性土(10YR4/1)植物を多く含む。やや青味を帯びる。⑤層のグライ化したもの。
⑦　にぶい黄橙色土(10YR7/2)やや粘性有り。④よりもしまりは良い。
⑧　にぶい褐色土(7.5YR6/3)鉄分を多く含み、赤味を帯びる。
⑨　灰褐色土(10YR5/2)⑤よりもしまりは良く、粘性は弱い。
1　灰黄褐色土(10YR4/2)水田の現耕作土。
2　黒褐色土(10YR3/2)現水田の床上。鉄分多く、マンガン含む。
3　にぶい黄橙色土(10YR6/3)ブロックは含まない。単一的。
4　灰黄褐色土(10YR5/2)やや粘性有り、旧畑の耕作土。
5　にぶい黄褐色土(10YR5/3)粘性有り。
6　にぶい黄褐色土(10YR5/4)粘性有り。５よりもやや黄色味が強い。
7　にぶい黄橙色粘性土(10YR6/3)
8　褐灰色砂層(10YR5/1)(洪水砂層)。
9　にぶい黄橙色粘性土(10YR7/4)しまりは良く、粘性は強い。
10　にぶい黄橙色粘性土(10YR6/4)９よりもやや暗い。
11　にぶい褐色土(7.5YR6/3)鉄分を多く含み、赤味が強い。しまりは良い。

0　1:100　5m

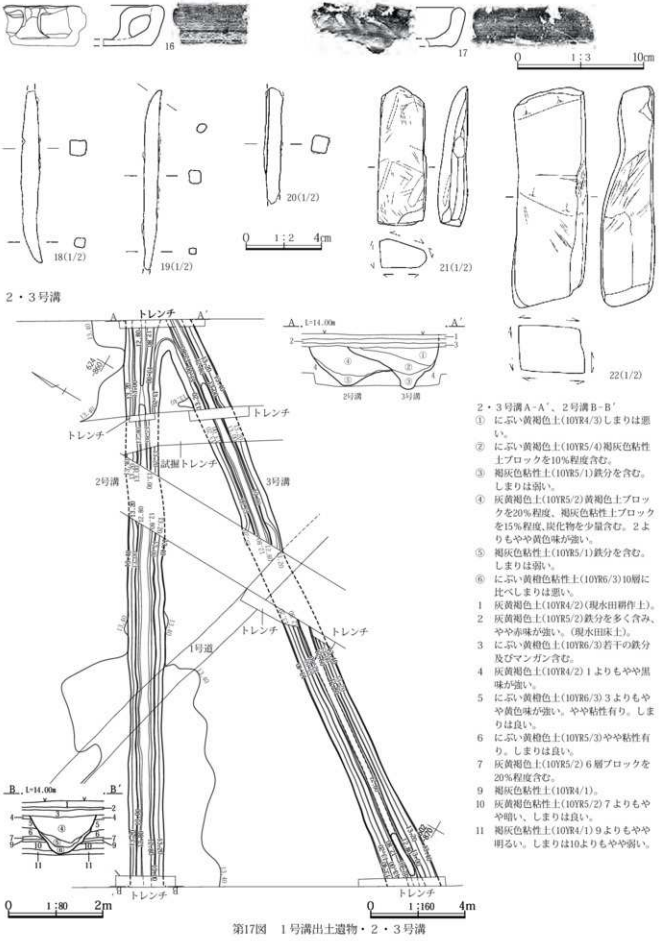






第16図　１号土坑・１号溝と出土遺物

0　1:3　10cm

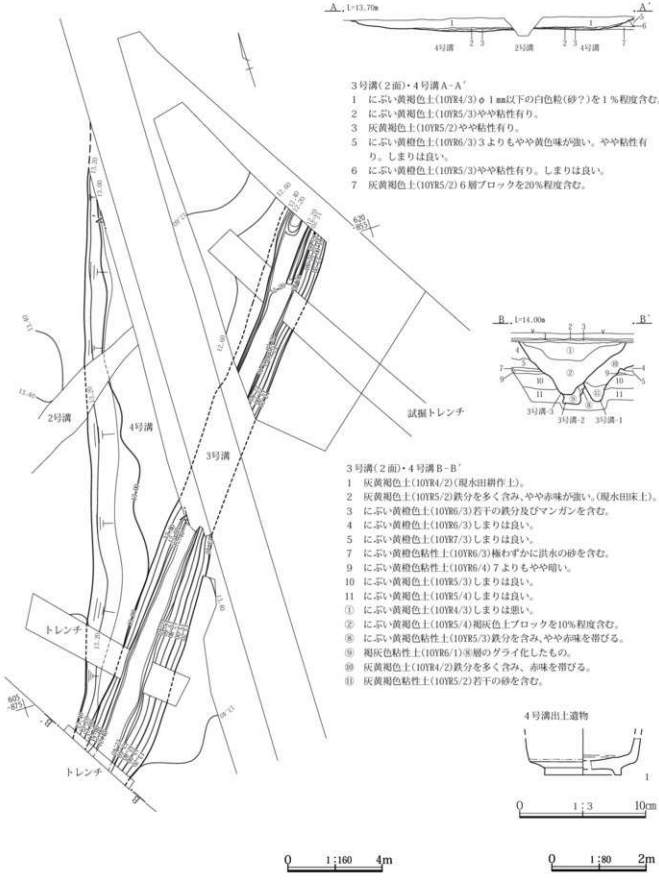


２・３号溝Ａ-Ａ'、２号溝Ｂ-Ｂ'

① にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまりは悪い。
② にぶい黄褐色土(10YR5/4)褐灰色粘性土ブロックを10%程度含む。
③ 褐灰色粘性土(10YR5/1)鉄分を含む。しまりは弱い。
④ 灰黄褐色土(10YR5/2)黄褐色土ブロックを20%程度、褐灰色粘性土ブロックを15%程度、炭化物を少量含む。２よりもやや黄色味が強い。
⑤ 褐灰色粘性土(10YR5/1)鉄分を含む。しまりは弱い。
⑥ にぶい黄橙色粘性土(10YR6/3)10層に比べしまりは悪い。
1 灰黄褐色土(10YR4/2)(現水田耕作土)。
2 灰黄褐色土(10YR5/2)鉄分を多く含み、やや赤味が強い。(現水田床土)。
3 にぶい黄橙色土(10YR6/3)若干の鉄分及びマンガン含む。
4 灰黄褐色土(10YR4/2)１よりもやや黒味が強い。
5 にぶい黄橙色土(10YR6/3)３よりもやや黄色味が強い。やや粘性有り。しまりは良い。
6 にぶい黄橙色土(10YR5/3)やや粘性有り。しまりは良い。
7 灰黄褐色土(10YR5/2)６層ブロックを20%程度含む。
9 褐灰色粘性土(10YR4/1)。
10 灰黄褐色粘性土(10YR5/2)７よりもやや暗い、しまりは良い。
11 褐灰色粘性土(10YR4/1)９よりもやや明るい。しまりは10よりもやや弱い。

第17図　１号溝出土遺物・２・３号溝

３号溝（２面）・４号溝



３号溝（２面）・４号溝Ａ－Ａ'

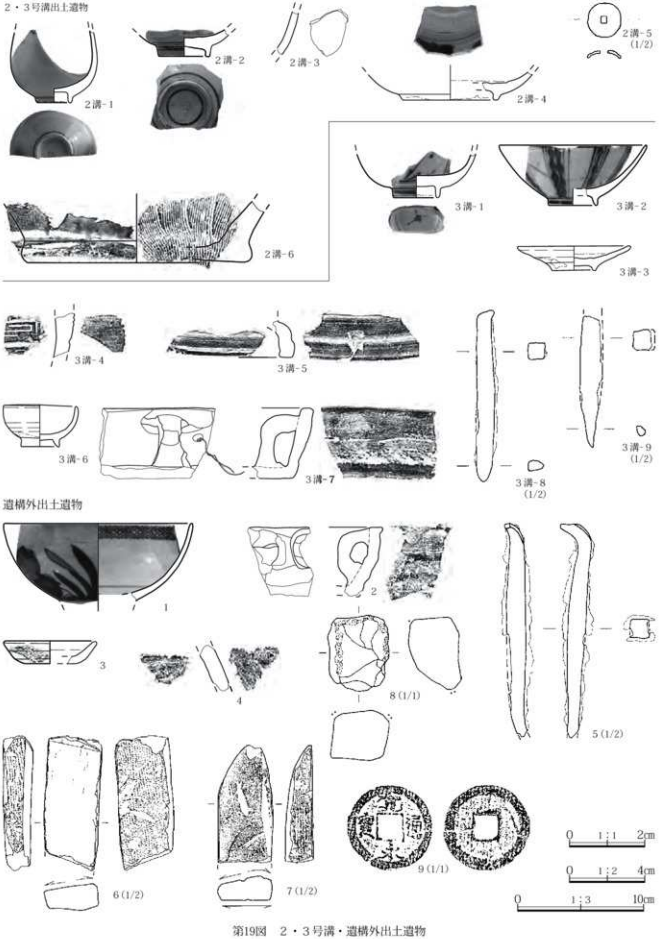
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）φ１mm以下の白色粒（砂？）を１％程度含む。
2　にぶい黄褐色土（10YR5/3）やや粘性有り。
3　灰黄褐色土（10YR5/2）やや粘性有り。
5　にぶい黄橙色土（10YR6/3）３よりもやや黄色味が強い。やや粘性有り。しまりは良い。
6　にぶい黄橙色土（10YR5/3）やや粘性有り。しまりは良い。
7　灰黄褐色土（10YR5/2）６層ブロックを20％程度含む。

３号溝（２面）・４号溝Ｂ－Ｂ'

1　灰黄褐色土（10YR4/2）（現水田耕作土）。
2　灰黄褐色土（10YR5/2）鉄分を多く含み、やや赤味が強い。（現水田床土）。
3　にぶい黄橙色土（10YR6/3）若干の鉄分及びマンガンを含む。
4　にぶい黄橙色土（10YR6/3）しまりは良い。
5　にぶい黄橙色土（10YR7/3）しまりは良い。
7　にぶい黄橙色粘性土（10YR6/3）極わずかに洪水の砂を含む。
9　にぶい黄橙色粘性土（10YR6/4）７よりもやや暗い。
10　にぶい黄褐色土（10YR5/3）しまりは良い。
11　にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまりは良い。
①　にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりは悪い。
②　にぶい黄褐色土（10YR5/4）褐灰色土ブロックを10％程度含む。
⑧　にぶい黄褐色粘性土（10YR5/3）鉄分を含み、やや赤味を帯びる。
⑨　褐灰色粘性土（10YR6/1）⑧層のグライ化したもの。
⑩　灰黄褐色土（10YR4/2）鉄分を多く含み、赤味を帯びる。
⑪　灰黄褐色粘性土（10YR5/2）若干の砂を含む。

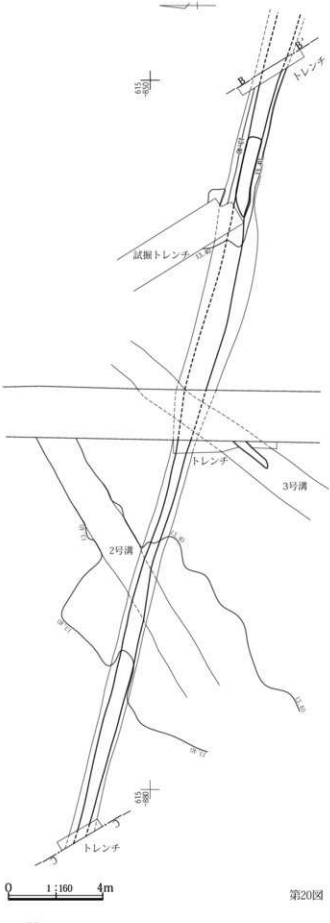
第18図　３号溝（２面）・４号溝と出土遺物

２・３号溝出土遺物

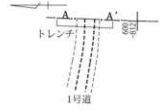


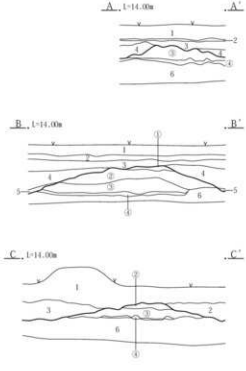
第19図　２・３号溝・遺構外出土遺物

1号道①



1号道②

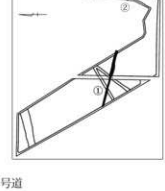




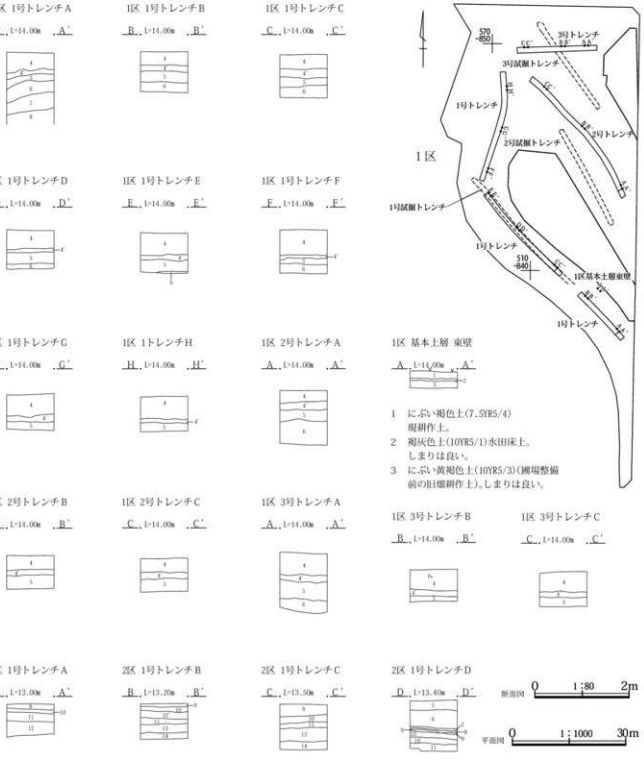
1　褐灰色土(10YR6/1)しまりは悪い。(現水田耕作土)。
2　灰黄褐色土(10YR6/2)鉄分を含み、赤味を帯びる、しまりは良い。(水田床土)。
3　にぶい黄褐色土(10YR5/3)しまりは良い。
4　灰黄褐色土(10YR4/2)しまりは良い。
5　褐灰色粘性土(10YR4/1)６層ブロックを10%程度含む。
6　にぶい黄橙色土(10YR6/3)ややシルト質。
①　灰黄褐色土(10YR5/2)しまりは極めて良い。硬質。
②　褐灰色土(10YR4/1)やや粘性有り。しまりは良い。
③　褐灰色粘性土(10YR4/1)しまりは悪く、ボロボロする。
④　灰黄褐色土(10YR5/2)しまりはやや弱い。６層ブロックを10%程度含む。

0　1:40　1m

1号道全体図

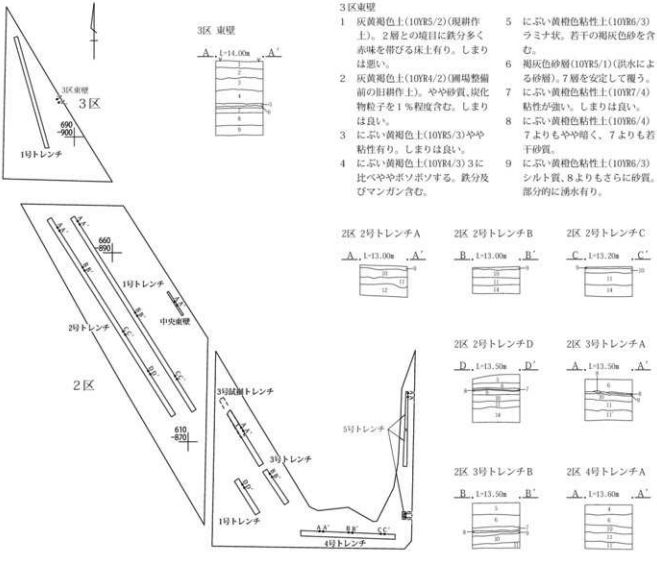


第20図　1号道



4　灰黄褐色土(10YR5/2)やや粘性有り。
4'　灰黄褐色土(10YR5/2)。
5　にぶい黄褐色土(10YR5/3)粘性有り。
6　にぶい黄褐色土(10YR5/4)粘性有り。５よりもやや黄色味が強い。
7　にぶい黄橙色粘性土(10YR6/3)。
8　褐灰色土(10YR5/1)褐灰色砂層(洪水砂層)。
9　にぶい黄橙色粘性土(10YR7/4)しまりは良く、粘性は強い。
10　にぶい黄橙色粘性土(10YR6/4)９よりやや暗い。
10'　にぶい黄橙色粘性土(10YR7/4)10よりもやや明るい。φ１mm以下の白色粒子(軽石？)。
11　褐色土(10YR5/2)炭化物粒を３％程度、φ１mm以下の白色粒子(軽石？)を１％程度含む。１号溝付近では、鉄分を多く含み、赤味が強い。
12　明オリーブ灰色土(5GY7/1)しまりは良い。11層のグライ化したもの。
１号溝付近の水が多いところで認められる。
13　にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)鉄分を多く含み、赤味を帯びる。
14　灰黄褐色砂層(10YR6/2)粒子は細かく、若干粘性有り。

第21図　２面トレンチ設定図・断面①



3区東壁

1　灰黄褐色土(10YR5/2)(現耕作上)。２層との境目に鉄分多く赤味を帯びる床土有り。しまりは悪い。
2　灰黄褐色土(10YR4/2)(圃場整備前の旧耕作上)。やや砂質、炭化物粒子を１％程度含む。しまりは良い。
3　にぶい黄褐色土(10YR5/3)やや粘性有り。しまりは良い。
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)３に比べややポソポソする。鉄分及びマンガン含む。
5　にぶい黄橙色粘性土(10YR6/3)ラミナ状。若干の褐灰色砂を含む。
6　褐灰色砂層(10YR5/1)(洪水による砂層)。７層を安定して覆う。
7　にぶい黄橙色粘性土(10YR7/4)粘性が強い。しまりは良い。
8　にぶい黄橙色粘性土(10YR6/4)７よりもやや暗く、７よりも若干砂質。
9　にぶい黄橙色粘性土(10YR6/3)シルト質、８よりもさらに砂質。部分的に湧水有り。

2区 4号トレンチB

1　灰黄褐色土(10YR4/2)しまりは悪く、ボロボロする。(現水田耕作上)。
2　黒褐色土(10YR3/2)鉄分を多く、マンガン含む。(現水田床土)。
3　にぶい黄橙色土(10YR6/3)単一的。
4　灰黄褐色土(10YR5/2)やや粘性有り。
5　にぶい黄褐色土(10YR5/3)粘性有り。
6　にぶい黄褐色土(10YR5/4)粘性有り。５よりもやや黄色味が強い。
7　にぶい黄橙色粘性土(10YR6/3)。
8　褐灰色土(10YR5/1)褐灰色砂層(洪水砂層)。
9　にぶい黄橙色粘性土(10YR7/4)しまりは良く、粘性は強い。
10　にぶい黄橙色粘性土(10YR6/4)９よりやや暗い。
11　褐色土(10YR5/2)炭化物粒を３％程度、φ１mm以下の白色粒子(軽石？)を１％程度含む。１号溝付近では、鉄分を多く含み、赤味が強い。
11′　にぶい黄橙色土(10YR6/3)11よりもやや明るい。φ１mm以下の白色粒子(軽石？？)を１％未満含む。炭化物は含まない。
12　明オリーブ灰色土(5GY7/1)しまりは良い。11層のグライ化したもの。１号溝付近の水が多いところで認められる。
14　灰黄褐色砂層(10YR6/2)粒子は細かく、若干粘性有り。

断面図　0　1:80　2m

平面図　0　1:1000　30m

第22図　２面トレンチ設定図・断面②

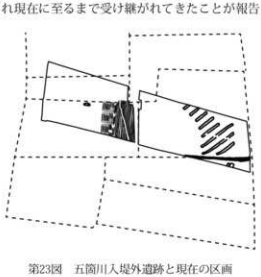
第５章　総　括

五箇川入堤外遺跡

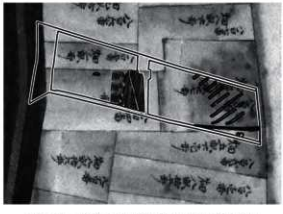
本遺跡で確認された遺構は、土坑13基・溝２条・畠１面である。出土している遺物は近世～近・現代の陶磁器や在地系の土器が主体である。遺跡は旧合の川の旧河道に位置しているため、洪水層が厚く堆積している。この旧合の川が締め切られ、利根川からの水の流れが完全に途絶えたのは、天保九(1838)年である。かつての流路の両岸には堤防跡が残り、現在は道路として使用されている。旧流路は、水田や釣り堀などとして開発されている。

遺跡は旧流路内にあるため湧水が多く、深く掘り下げることはできなかった。また、遺物量も少ないため、遺構の上限は特定できるが、いつ頃までさかのぼることができるかは難しい。よって、遺構と壬申地券地引絵図に描かれた図を比較することで土地利用について考察する。

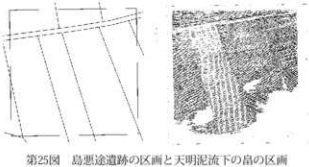
洪水災害と畑(畠)の区画　先に述べたように、本遺跡は旧合の川の旧流路内にある。同様に、旧合の川の旧流路に位置する島悪途遺跡では、天明三(1783)年の浅間山の大噴火に伴う泥流層の下から畑が検出されている。さらにその下層からも複数面の畠が確認された。畠が最初に作られたのは16世紀後半もしくは17世紀代と推定され、同時期には旧合の川には流水がなかった可能性が指摘されている。調査された畠のうち１区３面の畠の区画は、18世紀中頃以前と推定されている。この地点は250年間に数多くの洪水に見舞われながらも、その都度区画が復元され現在に至るまで受け継がれてきたことが報告されている(第25図)。



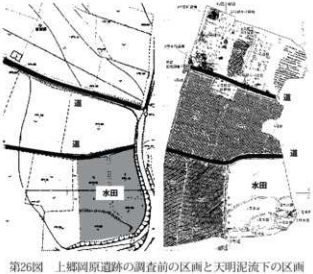
第23図　五箇川入堤外遺跡と現在の区画



第24図　五箇川入堤外遺跡と明治５年の区画



第25図　島悪途遺跡の区画と天明泥流下の畠の区画



第26図　上郷岡原遺跡の調査前の区画と天明泥流下の区画

同じ旧合の川の旧流路内にある五箇川入堤外遺跡でも、確認された畠の区画を現在の土地利用の様子や壬申地券地引絵図を比較すると、区画を維持してきた様子がうかがえる(第23・24図)。

被災後に畑(畠)や水田の区画が復元された事例として

上郷岡原遺跡(吾妻郡東吾妻町三島)がある。この遺跡では天明泥流下から水田・畑・道が検出された。調査前の土地利用の様子と発掘された区画を比較すると、ほぼ一致していることがわかる(第26図)。

五箇川入堤外遺跡でも、明治初期から現在まで区画が踏襲されてきたことから、近世以前にこの区画を利用してきたことが十分に考えられる。本遺跡で確認された畑が最初に作られた時期は、島悪途遺跡同様に近世より古い時代にさかのぼる可能性もある。

小合地西遺跡　本遺跡では、土坑１基、溝４条、道１条が調査された。現在の遺跡地周辺は、水田地帯が広がっているが、かつては洪水常襲地域であったため、洪水層が何層にもわたり堆積している。

壬申地券字引絵図(第27図)では１号溝と３号溝は同時期に利用されているが、２号溝は描かれていない。また、溝の周辺は畑として利用されている。

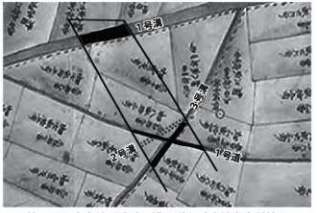
次に明治17年測量迅速測図をみると、溝周辺は畑から水田へと変化している。ただし、この図の縮尺は２万分の１のため、１号溝と道以外の遺構は確認できない(第28図)。

昭和21(1946)年３月24日米軍撮影の空中写真では、１～３号溝と道を確認することができる(第29図)。同22(1947)年10月28日撮影分では１号溝は流路が変更され、３号溝は廃絶されていることがわかる(第30図)。

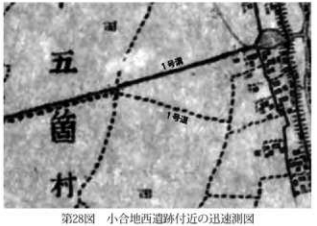
以上のことをまとめると次のようになる。①江戸時代もしくはそれ以前に畑の耕作が開始され、１・３号溝、道が使用される。②明治５年から17年の間に畑が水田化される。③昭和21年３月までに２号溝が掘削される。④昭和22年10月までに１号溝の流路が変更され、３号溝が使用されなくなる。

まとめ　五箇川入堤外遺跡・小合地西遺跡周辺は洪水常襲地帯であり、これと対峙した先人の苦労は想像に難くない。これまで遺構がなかった下五箇地区で、畠や溝、道などが検出されたことは板倉町の低地帯における人々の生活を考えるうえで貴重な資料であると思われる。

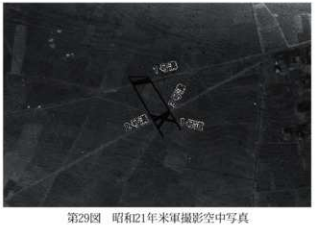
参考文献・資料
1　板倉町史編さん委員会　『板倉町史　通史　上巻』 1985
2　板倉町史編さん委員会　『板倉町史　通史　下巻』 1985
3　板倉町教育委員会　『板倉町の遺跡』 1992
4　群馬県埋蔵文化財調査事業団　『島悪途遺跡』 2006
5　群馬県埋蔵文化財調査事業団　『上郷岡原遺跡(１)』 2007
第24図・第27図は上野國邑楽郡下五箇村絵図を加工して使用
第29図・第30図は国土地理院の空中写真を加工して使用



第27図　小合地西遺跡の溝・道と壬申地券字引絵図



第28図　小合地西遺跡付近の迅速測図


第29図　昭和21年米軍撮影空中写真

第30図　昭和22年米軍撮影空中写真

第２表　五箇川入堀外遺跡遺構一覧表

区	No.	遺構種	グリッド	平面形	長軸 m	短軸 m	残存壁高 m	長軸方位	本文 頁	挿図 番号	写真 PL.	備考()は非掲載遺物
1	1	土坑	112・-357	楕円形	8.12	0.94	0.43	N−55°−E	8	9	1・2	
1	2	土坑	115・-358	楕円形	14.63	0.74	0.49	N−54°−E	8	9	1・2	磁器染付碗？１点。在地系土器内耳焙烙１点。(近現代の瓦２点。)
1	3	土坑	119・-358	楕円形	15.22	0.85	0.53	N−51°−E	8	9	2	磁器碗１点。(時期不明の上師器２点。近世の国産磁器１点。近現代の瓦２点。)
1	4	土坑	119・-363	楕円形	8.47	0.87	0.45	N−51°−E	8	10	2	在地系土器内耳焙烙１点。
1	5	土坑	121・-366	楕円形	7.15	0.92	0.49	N−49°−E	8	10	3	
1	6	土坑	124・-368	隅丸長方形	5.39	0.93	0.45	N−50°−E	8	10	3	
1	7	土坑	125・-372	楕円形	(4.47)	0.79	0.41	N−47°−E	8	10	3・4	(時期不明の土師器１点。近世の在地系焙烙・鍋１点。)
1	8	土坑	126・-376	隅丸長方形	(2.57)	0.81	0.30	N−50°−E	8	10	3・4	
1	9	土坑	104・-357	不定形	(1.46)	1.40	0.29	N−16°−E	8	10	4	
1	10	土坑	104・-359	不定形	(1.24)	0.79	0.27	N−10°−E	8	10	4	
2	11	土坑	125・-416	楕円形	0.68	0.56	0.23	N−40°−W	8	10	4	
2	12	土坑	125・-415	隅丸方形	(1.01)	0.85	0.34	N−9°−E	8	10	4・5	
2	13	土坑	125・-414	不定形	0.91	0.86	0.34	N−17°−W	8	10	4・5	(時期不明の上師器１点。近世の国産磁器１点、国産施釉陶器１点、在地系皿１点。)

区	No.	遺構種	グリッド	調査長 m	上幅 m	残存深 m	走向	本文 頁	挿図 番号	写真 PL.	備考()は非掲載遺物
1	1	溝	106〜107・-351〜-376	25.72	1.43	0.61	N−89°−W	8	11	5	(在地系焙烙・鍋１点。近現代の瓦１点。)
2	2	溝	112〜127・-399〜-403	16.44	0.68	0.49	N−15°−W	8	11	5	陶器汁次竹口１点。(時期不明の上師器１点。近世の国産施釉陶器１点。)

区	No.	遺構種	グリッド	最大長 m	確認長 m	幅 m	棚の方向	本文 頁	挿図 番号	写真 PL.	備考()は非掲載遺物
2	1	畠	111-396〜129-410	15.30	12.80	0.52	N−3°−E	9	12・13	6・10	肥前磁器筒形碗１点。陶器鉢か皿１点。在地系土器内耳焙烙１点。(近世の国産施釉陶器１点。)

第３表　小合地西遺跡遺構一覧表

区	No.	遺構種	グリッド	平面形	長軸 m	短軸 m	残存壁高 m	長軸方位	本文 頁	挿図 番号	写真 PL.	備考
1	1	土坑	574・-837	隅丸方形	1.06	0.94	0.27	N−33°−W	15	16	7	

区	No.	遺構種	グリッド	調査長 m	上幅 m	残存深 m	走向	本文 頁	挿図 番号	写真 PL.
2	1	溝	660〜670・-885〜-905 磁器染付小杯１点。瀬戸・美濃磁器染付端反碗１点。肥前磁器染付碗・染付皿・染付猪口・染付瓶各１点。瀬戸・美濃陶器丸皿・染付筒形碗各１点。龍泉窯系青磁碗１点。陶器香炉１点。磁器香炉１点。瀬戸・美濃陶器鉢１点。常滑陶器壺？１点。丹波陶器擂鉢１点。在地系土器内耳焙烙３点。鉄製品釘３点。石製品砥石２点。(土師器不明１点。近世の国産磁器23点、国産施釉陶器25点、在地系焙烙・鍋16点。近現代の陶磁器７点、瓦15点、ガラス１点。時期不詳の土器類３点、その他５点。)	22.60 610〜624・-857〜-878 磁器小碗１点。肥前磁器染付碗１点。肥前磁器染付皿１点。瀬戸・美濃陶器碗？１点。陶器擂鉢１点。金属製品留め金１点。(近世の国産磁器１点、国産施釉陶器４点。在地系皿１点。その他２点。)	5.19 23.91	0.95 1.50	0.81	N−75°−E N−58°−E	15 15・17	16・17 17・19	8・11 8・9・11
2	2	溝	600〜623・-856〜-873 磁器染付碗２点。肥前磁器皿１点。在地系火鉢２点。在地系土器内耳焙烙１点。瀬戸・美濃陶器小杯１点。鉄製品釘２点。(時期不明の上師器１点。近世の国産磁器１点、国産施釉陶器１点。在地系焙烙・鍋７点。在地系その他１点。近現代の陶磁器13点、土器類４点、瓦８点、ガラス１点、その他１点。時期不詳その他３点。)	25.92 610〜624・-855〜-875	1.48 23.90	0.96 0.47	N−36°−E N−31°−E	17 17	17〜19 18	9・11 9
2	3	溝	600〜624・-853〜-875 瀬戸・美濃陶器香炉？１点。(近世の国産磁器１点、国産施釉陶器１点、在地系焙烙・鍋１点。)							

区	No.	遺構種	グリッド	調査長 m	上幅 m	走向	本文 頁	挿図 番号	写真 PL.	備考
2	1	道路状遺構	600〜619・-812〜-882	71.6	0.98	N−76°−E	17	20	9	

第４表　五箇川入堤外遺跡遺物観察表

２号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第9図 PL.10	1	磁器 染付碗か	+18cm 体部破片	口 底		高		夾雑物含まない/ /灰白	外面に染付。	江戸時代。
第9図 PL.10	2	在地系土器 内耳焙烙	+3cm 口縁部破片	口 底		高		細砂粒/～/灰白・黒	焼成良好。内面、剥落。外面燻し、黒色味。口唇部は平坦面をなす。体部は外傾して開くか。外面、横ナデ、下位にヘラ削り。残存部下位には粗いナデ。	江戸時代。

３号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第9図 PL.10	1	磁器 碗	+9cm 口縁部破片	口 底		高		夾雑物含まない/ /灰白	残存部分は無文。透明釉。	江戸時代。

４号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第10図 PL.10	1	在地系土器 内耳焙烙	埋土 口縁部破片	口 底		高		黒色鉱物粒少量/ /橙・褐色	焼成良好。外面燻し、黒色味。口唇部は丸頭状を呈する。内外面横ナデ。	近・現代。

２号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第11図 PL.10	1	陶器 汁次	±0cm 片口周辺破片	口 底		高		夾雑物含まない/ /灰	断面U字形の片口が付く。内面無釉。	時期不明。

１号畠

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第13図 PL.10	1	肥前磁器 筒形碗	+11cm 体部破片	口 底		高		夾雑物含まない/ /灰白	体部は直立気味に立ち上がる。外面に半菊文の染付。内面、底部周縁に圏線。	18世紀後半。
第13図 鉢か皿	2	陶器	±0cm 体部～高台部破片	口 底		高		夾雑物少量/～/灰	内外面に灰釉。	時期不明。
第13図 PL.10	3	在地系土器 内耳焙烙	±0cm 口縁部破片	口 底		高		黒色鉱物少量/～/ 灰黄・黒褐	焼成良好。内外面燻し、黒色味。幅広の内耳剥落。外面横ナデ、残存下位にヘラ削り。	江戸時代。

トレンチ

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第13図 PL.10	1	在地系土器 皿	北トレンチ 口縁部破片	口 底	(10.0)	高		細砂粒少量/～/橙	焼成良好。体部は外反、口縁部で内湾。内外面横ナデ。	江戸時代か。
第13図 PL.10	2	縄文土器 深鉢	中央トレンチ 破片	口 底		高			条線文。	側口、磨滅。
第13図 PL.10	3	在地系土器 内耳焙烙	中央トレンチ 口縁部破片	口 底		高		黒色鉱物粒/～/淡黄	焼成良好。外面燻し、黒色味。口唇部内側に平坦面を有する。内外面横ナデ。	江戸時代。

遺構外

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第13図 PL.10	1	瀬戸・美濃 陶器 小碗	表採 体部～高台部	口 底	2.6	高		鉱物粒少量/～/淡黄	体部外面下位回転ヘラ削り。内面に透明釉。	江戸時代。
第13図 PL.10	2	瀬戸・美濃 陶器 小碗	表採 1/4	口 底	(7.3) (3.6)	高	3.5	鉱物粒/～/浅黄	体部下半はヘラ削り。外面の口縁部から体部上半と内面全面に施釉がかかる。	江戸時代。
第13図 PL.10	3	肥前磁器 皿	表採 1/4	口 底	(14.0) (8.0)	高	4.5	夾雑物含まない/ /灰白	内外面に染付。外面は唐草文。体部下位から高台境にかけて三重の圏線。	18世紀代。
第13図 PL.10	4	瓶泉窯系 青磁 不詳	表採 破片	口 底		高		夾雑物含まない/ /灰白	発色悪い。外面に鎬蓮弁文。内面剥離。	13世紀代。
第13図 PL.10	5	在地系土器 皿	表採 体部～底部	口 底	(3.0)	高		細砂粒少量/～/に ぶい黄橙	口縁部高い。内面は内湾ぎみに斜め上方に立ちあがる。ロクロ整形。回転は右回転。	時期不明。
第13図 PL.10	6	在地系土器 皿	表採 体部～底部	口 底	(3.0)	高		細砂粒少量/～/に ぶい黄橙	口縁部高い。体部は外反して立ち上がる。ロクロ整形。回転は右回転。底部切り離し後無調整。	時期不明。
第13図 PL.10	7	瀬戸・美濃 陶器 擂鉢	表採 体部破片	口 底		高		黒色鉱物粒/～/淡黄	内外面に錆釉。内面にすり目。	江戸時代。
第13図 PL.10	8	在地系土器 内耳鍋	表採 口縁部破片	口 底		高		白色鉱物粒微量/ /灰白	焼成良好。内外面燻し。内外面横ナデ。	中世。
第13図 PL.10	9	鉄製品 釘	表採 一部欠損	長 幅	10.5 1.3	厚 重	1.2 24.3		さっぱ釘が劣化により変形。頭部の折れが不明瞭。全体に錆びにおおわれ、一部欠損している。	

第５表　小合地西遺跡遺物観察表

２区１号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値					胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第16図 PL.11	1	磁器 染付小杯	理土 口縁部欠損	口底	2.8		高		夾雑物含まない/-/灰白	外面に染付。高台端に圏線。内面無文。	近・現代。
第16図 PL.11	2	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	理土 体部下位～高台部1/4	口底	(4.0)		高		夾雑物含まない/-/灰白	外面に染付。体部下位と高台端、高台外面に圏線。内面、見込一重圏線内に不明文様。	19世紀中頃。
第16図 PL.11	3	肥前磁器 染付碗	理土 体部中位～高台部1/4	口底	3.8		高		夾雑物含まない/-/灰白	外面に雪輪梅樹の染付文。体部下位と高台端に圏線。内面無文。	18世紀後半。
第16図 PL.11	4	瀬戸・美濃 陶器 染付筒形碗	理土 1/2	口底	(7.0) (2.9)		高	5.7	夾雑物含まない/-/灰	外面は体部に菊花文染付。底部に二重圏線、高台端に一重圏線。内面は口縁部内面に二重圏線。見込に一重圏線、区画内に不明文様文。	18世紀後半～19世紀初め。
第16図 PL.11	5	肥前磁器 染付猪口	理土 体部下位～高台部破片	口底	(5.2)		高		夾雑物含まない/-/灰白	焼成不良。外面に染付文。高台外面に二重圏線。	18世紀代。
第16図 PL.11	6	肥前磁器 染付瓶	理土 体部下位～高台部1/4	口底	(6.0)		高		夾雑物含まない/-/灰白	外面、体部上位に蝶唐草文。	18世紀～19世紀前半。
第16図 PL.11	7	肥前磁器 染付皿	理土 体部下位～高台部1/5	口底	7.0		高		夾雑物含まない/-/灰白	内外面に染付文。墨弾き。外面は体部下位と高台端に圏線。内面見込二重圏線。底部中央に五弁花。コンニャク版か。	肥前か。18世紀代。
第16図	8	瀬戸・美濃 陶器 丸皿	理土 体部下位～底部1/4	口底	(7.0)		高		黒色鉱物少量含む/-/灰白	内外面に長石釉。底部回転ヘラ削り。高台端部磨滅。	17世紀代。
第16図	9	龍泉窯系 青磁 碗	理土 体部破片	口底			高		夾雑物含まない/-/灰白	外面に鎬蓮弁文。	13世紀代。
第16図 PL.11	10	陶器 香炉	理土 体部下位～高台部	口底	(3.5)		高		夾雑物含まない/-/灰・にぶい赤褐	外面に鉄釉。内面見込に輪状の重ね焼き痕を残す。	産地不明。江戸時代か。
第16図	11	磁器 香炉	理土 1/4	口底	(13.0) (5.0)		高	4.9	夾雑物含まない/-/灰白	体部は内湾ぎみに立ちあがり、端部は強く外方に向けて屈曲する。焼成不良。青磁釉。溶る。内面見込に重ね焼きの痕跡と墨書。カタカナの「イ」か。	産地不明。18世紀後半～19世紀代。
第16図	12	瀬戸・美濃 陶器 鉢	理土 口縁部破片	口底			高		夾雑物含まない/-/灰オリーブ	体部は斜め外方に立ちあがる。端部は屈曲、水平方向に延びる。内外面に緑釉。	江戸時代。
第16図	13	常滑陶器 壺か	理土 口縁部破片～体部上位	口底			高		細砂粒/-/灰黄	口縁部は外面先端が段をなすように屈曲して立ち上がる。	13世紀前半～中頃。
第16図	14	丹波陶器 摺鉢	理土 口縁部破片～体部上位	口底			高		白色鉱物粒/-/黄灰	口縁部は外面先端が屈曲して立ち上がる。内面に7本1単位のすり目。鉄釉。	江戸時代。
第16図	15	在地系土器 内耳焙烙	理土 口縁部～底部破片	口底			高	4.7	黒色鉱物粒少量/-/灰・黒	体部はわずかに外傾。底部平底。内外面とも煤し、黒色化。内外面とも横ナデ。	江戸時代。
第17図 PL.11	16	在地系土器 内耳焙烙	理土 口縁部～底部破片	口底			高	3.2	粗砂粒少量含む/-/にぶい褐・黒褐	体部はわずかに外傾。底部は丸底気味か。内耳は底面につく。外面煤付着。内外面とも横ナデ。	近代か。
第17図 PL.11	17	在地系土器 内耳焙烙	理土 口縁部～底部破片	口底			高	3.1	黒色鉱物粒少量/-/にぶい橙・黒褐	体部は短い。底部は平底。内外面とも煤し。横ナデ。	近・現代。
第17図 PL.11	18	鉄製品 釘	理土 一部欠損	長幅	9.1 1.0	厚重	0.9 25.7			合釘。片方の端部は残存していないが、17図19・20と同様のものと思われる。下端部よりθ6mほどで破損し、芯鉄が見えている。	
第17図 PL.11	19	鉄製品 釘	理土 ほぼ完形	長幅	9.5 1.0	厚重	1.0 16.7			合釘。両端部が脚部のようになり、上端部がやや湾曲している。全体が錆で劣化し、剥離の恐れがある。	
第17図 PL.11	20	鉄製品 釘	理土 一部欠損	長幅	6.1 1.0	厚重	1.0 11.0			合釘。両端部が欠損しているが、両端ともやや細くなる傾向が見られる。全体がさびに覆われ、劣化が激しい。	
第17図 PL.11	21	石製品 砥石	理土 完形	長幅	7.3 2.5	厚重	1.5 35.2	砥沢石		砥面は4面認められる。表面が主要な砥面であり上方に向かい著しく研ぎ減りする。左側面はほぼ平坦である。裏面及び右側面は消らかな箇所が部分的に認められ恒常的な砥面とは考えられない。	
第17図 PL.11	22	石製品 砥石	理土 完形	長幅	11.6 3.9	厚重	2.8 176.1	砥沢石		砥面は4面認められる。表面は上方に向かい著しく研ぎ減りする。左側面は中央が研ぎ減りしやや内湾する。右側面及び裏面はほぼ平坦である。右側面の中央付近には断面V字状の斜め方向の線条痕が集中する。	

２区４号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値					胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第18図	1	瀬戸・美濃 陶器 香炉か	理土 体部下位～高台部1/3	口底	(6.0)		高		夾雑物含まない/-/淡黄	高台周辺回転ヘラ削り。体部外面に染付。細かな貫入入る。	大人れの可能性あり。江戸時代。

2区2号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第19図 PL.11	1	磁器 小碗	埋土 体部～高台部 1/3	口 底	(2.7)	高		夾雑物含まない/－/灰白	体部は内湾ぎみに立ちあがる。体部外面に不明文。高台境に圏線。底部外面に銘、九谷か。	近・現代。
第19図 PL.11	2	肥前磁器 染付碗	埋土 体部下位～高台部	口 底	4.0	高		夾雑物含まない/－/灰白	内面蛇の目釉剥ぎ。体部下位と高台境から高台外面に圏線。高台内、底部外面にも一重圏線。	18世紀中頃～後半。
第19図 PL.11	3	瀬戸・美濃 陶器 碗か	埋土 体部破片	口 底		高		細砂粒少量/－/淺黄	内外面に灰釉。	16世紀代。(大窯期)か。
第19図 PL.11	4	肥前磁器 染付皿	埋土 体部下位～高台部	口 底		高	(7.5)	夾雑物含まない/－/灰白	内面蛇の目釉剥ぎ。見込に二重圏線を巡らし、これより上位の体部に染付。	18世紀後半～19世紀前半。
第19図 PL.11	5	金属製品 留め金	埋土 完形	長 幅	1.8 1.8	厚 重	0.4 1.6		留め金と考えられる。全体に剥離が見られ、やや状態が悪い。中心に長方形の穴が空き、外側より内側の穴がわずかに小さい。	
第19図 PL.11	6	陶器 擂鉢	埋土 体部～底部破片	口 底	(17.6)	高		白色・黒色鉱物粒/－/にぶい橙	外面に箱釉。内面に1単位12本以上のすり目。底部周縁部器面磨滅。	産地不明。近・現代。

2区3号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第19図 PL.11	1	磁器 染付丸碗	埋土 体部中位～高台部1/4	口 底	3.5	高		夾雑物含まない/－/灰白	端反りか。外面に染付。高台境近くと高台外面に圏線。内面、見込一重圏線内に不明文様。	近・現代。
第19図 PL.11	2	磁器 染付平碗	埋土 1/3	口 底	(11.6) (3.8)	高	4.8	夾雑物含まない/－/灰白	外面に染付。	近・現代。
第19図 PL.11	3	肥前磁器 皿	埋土 1/3	口 底	(8.9) 3.4	高	1.9	黒色鉱物粒微量/－/灰白	焼成不良。体部下位内外面回転ヘラ削り。残存部からは染付の有無不明。内面は蛇の目釉剥ぎ。	17世紀代。
第19図	4	在地系土器 火鉢	埋土 体部破片	口 底		高		細砂粒/－/にぶい赤褐・黒	器面厚い。外面、黒色味。雷文か。	時期不明。
第19図	5	在地系土器 火鉢	埋土 高台部破片	口 底		高		細砂粒/－/にぶい橙	体部短いか。内外面横ナデ。	時期不明。
第19図 PL.11	6	瀬戸・美濃 陶器 小碗	埋土 口縁部一部欠損	口 底	5.8 3.0	高	3.3	鉱物粒少量/－/灰白	体部下半回転ヘラ削り。無文。内外面に灰釉。	18世紀～19世紀代。
第19図	7	在地系土器 内耳焙烙	埋土 破片	口 底		高	5.6	黒色鉱物粒/－/灰白・黒	体部はやや外傾。口唇部は平坦面をなす。内耳は底面につく。内外面煤し、黒色化。外面に煤付着。口縁部から体部上位は横ナデ。下位はヘラナデ。	体部に補修孔を穿ち、これに針金を通す。江戸時代。
第19図	8	鉄製品 釘	埋土 一部欠損	長 幅	9.0 1.2	厚 重	1.1 27.7		頭部が一部欠損した釘。断面は長方形。全体に劣化が激しく、さびによる剥離、欠損も見られる。	
第19図 PL.11	9	鉄製品 釘	埋土 一部欠損	長 幅	6.9 1.2	厚 重	1.1 13.8		頭部にやや折れが見られるが、詳細は不明。断面はほぼ方形になり、脚部断面は長方形になるか。全体にさびが見られ、劣化が激しい。	

遺構外

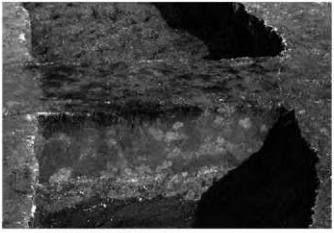
挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第19図 PL.12	1	備前磁器 染付碗	表採 口縁部～体部 1/4	口 底	(14.8)	高		夾雑物含まない/－/灰白	体部外面に染付。内面、口縁部に四方襷文。見込に二重圏線。	二次被熱あり。江戸時代。
第19図 PL.12	2	在地系土器 内耳焙烙	口縁部～体部破片	口 底		高		黒色粘土粒/－/灰白	体部は内湾ぎみに斜め上方に立ちあがる。口唇端部は平坦面。内耳は体部につく。	江戸時代。
第19図 PL.12	3	在地系土器 皿	2面下 1/4	口 底	(7.2) (4.0)	高	1.8	鉱物粒少量/－/淺黄橙	ロクロ整形。回転は右回り。	江戸時代。
第19図	4	常滑陶器 甕	－ 体部破片	口 底		高		鉱物粒/－/黄灰	小破片。外面に自然釉付着。	中世。
第19図 PL.12	5	鉄製品 釘	表採 －	長 幅	11.2 1.9	厚 重	1.7 36.5		合折釘。両端に脚部を持ち、片方の端部が折られている。状態が悪く劣化によりやせが見られ、内部に空洞も見られる。	
第19図 PL.12	6	石製品 砥石	表採 2/3	長 幅	(7.2) 3.1	厚 重	1.6 45.9	変質デイサイト	表面にほぼ平坦な砥面が認められる。左右両側面及び裏面には櫛歯タガネ痕が明瞭に残る。	
第19図 PL.12	7	石製品 砥石	表採 1/2	長 幅	(6.2) 2.9	厚 重	(1.5) 36.3	玉髄	砥面は2面認められる。表面は上方に向かい著しく研ぎ減りする。裏面はほぼ平坦である。左右両側面には櫛歯タガネ痕がわずかに残る。	
第19図 PL.12	8	石製品 火打石	表採 完形	長 幅	2.0 1.6	厚 重	1.3 6.5	変質デイサイト	稜上に微細剥離痕とつぶれ痕が明瞭に認められる。	
第19図 PL.12	9	古銭 寛永通寶	表採 完形	長 幅	2.297 2.290	厚 重	0.307 1.8		新寛永。背足。3つの破片に破損している。面の彫は深く、字、郭、輪が明瞭。背はやや彫が浅いが、それぞれ明瞭。	

写 真 図 版

1．五箇川入堤外遺跡調査前全景（西から）

2．1号土坑全景（北東から）

3．2号土坑全景（北東から）



1．1号土坑土層断面(南西から)

2．2号土坑土層断面(南西から)

3．3号土坑土層断面(南西から)

4．4号土坑土層断面(南西から)

5．3号土坑全景(北東から)

6．4号土坑全景(南西から)

1．5号土坑全景(南西から)

2．6号土坑全景(南西から)

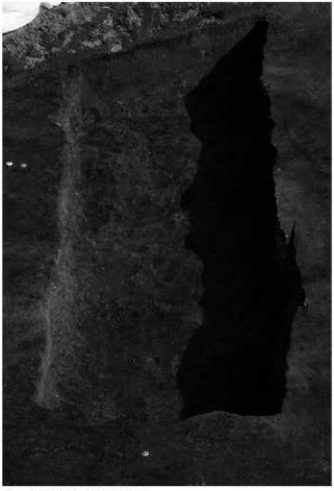
3．5号土坑土層断面(南西から)

4．6号土坑土層断面(南西から)

5．7号土坑土層断面(南西から)

6．8号土坑土層断面(南西から)

1．7号土坑全景(南西から)



2．8号土坑全景(南西から)

3．9号土坑全景(北から)

4．10号土坑全景(北から)

5．左より11～13号土坑土層断面(南から)

6．11号土坑全景(北から)

1．12号土坑全景(北から)

2．13号土坑全景(北から)

3．1号溝土層断面(西から)

4．2号溝土層断面(北から)

5．1号溝全景(東から)

6．2号溝全景(北から)

1．1号畠全景(1)(北から)

2．1号畠全景(2)(北から)

1．小合地西遺跡全景(南東から)

2．1区調査風景(南東から)

3．2区1面調査区全景(南東から)

4．1号土坑土層断面(南東から)

5．1号土坑全景(南東から)

1．1号溝全景(西から)

2．1号溝土層断面(西から)

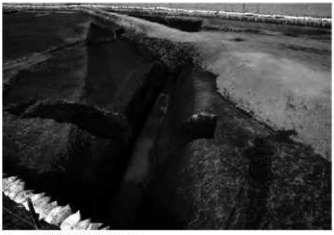
3．1号溝調査風景(東から)

4．2号溝全景(東から)

1．2号溝土層断面(東から)

2．2・3号溝土層断面(西から)

3．3号溝土層断面(東から)



4．4号溝全景(南西から)

5．1号道土層断面(南から)

6．1号道全景(605-850・西から)

7．1号道全景(600-812・西から)

8．3区2面調査区全景(南東から)

2上－1

2上－2

3上－1

4上－1

2溝－1

1畠－1

1畠－2

1畠－3

トレンチ－1

トレンチ－2

トレンチ－3

遺構外－1

遺構外－2

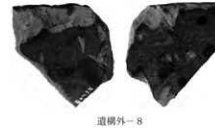
遺構外－3

遺構外－4

遺構外－5

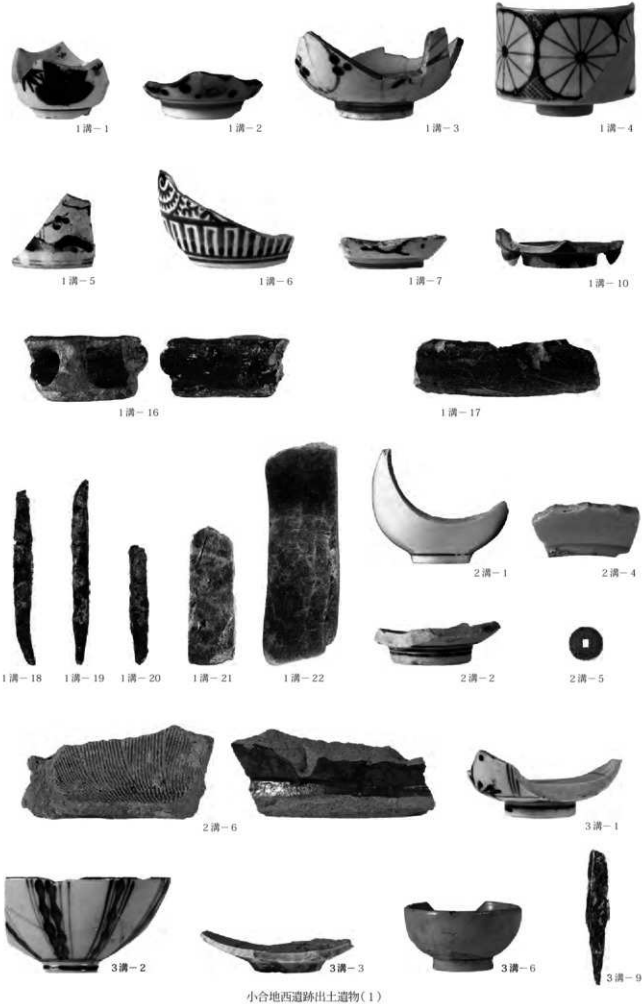
遺構外－6

遺構外－7


遺構外－8

遺構外－9

五箇川入堤外遺跡出土遺物



小合地西遺跡出土遺物（1）

遺構外－1

遺構外－2

遺構外－3

遺構外－8

遺構外－5

遺構外－6

遺構外－7

遺構外－9

発掘調査報告書抄録

書名ふりがな	ごかかわいりていがいいせき・こごうちにしいせき
書　　名	五箇川入堤外遺跡・小合地西遺跡
副　書　名	国道354号板倉北川辺バイパス社会資本総合整備(広域・埼玉)(活力・重点)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	631
編著者名	齊田智彦
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20171115
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住　　所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	ごかかわいりていがいいせき
遺　跡　名	五箇川入堤外遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおうらぐんいたくらまちしもごか
遺跡所在地	群馬県邑楽郡板倉町下五箇
市町村コード	10521
遺跡番号	0117
北緯（世界測地系）	361155
東経（世界測地系）	1393902
調査期間	20170101-20170331
調査面積	2230
調査原因	道路建設
種　　別	包蔵地/集落/生産
主な時代	縄文/中世/近世
遺跡概要	縄文-土器/中・近世-溝2+畠1+土坑13-土器+石製品+陶磁器+金属器+通貨
特記事項	洪水層下の土坑、溝、畠の調査
要　　約	本遺跡は旧合の川の流路内に位置している。堤防の外側にある区画から、土坑、溝、畠が検出された。
遺跡名ふりがな	こごうちにしいせき
遺　跡　名	小合地西遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおうらぐんいたくらまちしもごか
遺跡所在地	群馬県邑楽郡板倉町下五箇
市町村コード	10521
遺跡番号	0268
北緯（世界測地系）	361214
東経（世界測地系）	1393845
調査期間	20170101-20170331
調査面積	6930
調査原因	道路建設
種　　別	包蔵地/集落/生産
主な時代	中世/近世
遺跡概要	中・近世-溝4+道1+土坑1-石製品+陶磁器+金属器+通貨
特記事項	洪水層下の土坑、溝、畠の調査
要　　約	本遺跡は板倉低地帯に位置している。洪水層の下から、溝３条と道跡が検出された。この地域での発掘調査の例はほとんどなく、貴重な調査例である。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第631集

五箇川入堤外遺跡・小合地西遺跡

国道354号板倉北川辺バイパス社会資本総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成29(2017)年11月　8日　印刷
平成29(2017)年11月15日　発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
電話(0279)52-2511(代表)
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／川島美術印刷株式会社